



カロ
627
1

妙玄大徳著

活語山口千秋全三冊 部

製本所

文海堂
羣玉堂



吉野隆平藏書



ふにれもきのばく書
みやひきまわらもくくとあらまく
まくてもうるえはくらゆめとぞ
くくろあすとくよしとよしゆれ等え
あらりひくせんの邊れも手引ふ
まゆりへんせきとせのくそせの

かく度此里よりは昨と今より十数日も
つゝて年を過ぐるにあらずとぞ思ひ
て是はもううれと作のやうとおもひ
人ふざるよれどもまことにたまはるのを
ゆくことふせんとぞいふ事なるをやく
りぬりかのひやくれまととすもとれ

のとそつれりのわくえとぞいふ
あくとくの御代をとせんすもとせうと
えくがんのれを年ねのくじとくをと
ほあらむとくをとくをとくをとくをと
せくのくじとくをとくをとくをとくをと

めにけりけりと人のよれせぬけとまつよあらす
かうさんやをきもとも初のほんじてとひまつ
わらえましらあくとすられなほんじてとひまつ
とあられ等ひゆきとくはゆきとれとひまつ
まうするもたうひてひまつとひまつとひまつ
ひとひまつとひまつとひまつとひまつとひまつ

人乃よれちとがくよくさうたるよまうす
ちんあくしの老のくすむけまのやううとうと
ううれをたうすとそくうせ
つはよひまうひんごくとす

文政三年の夏 松齋太中臣藤井宿祐す焉

山口菜

上卷目錄

初丁方

○總論 言語音聲比轉に於て九そ三つ比差別有る事を示す

ハウ

○用言とあらぬ詞の音比轉るとの和音ためニヶ條

十三オ

○中二段、下二段とに活く語の事

同

○活ねかよく誤る活とも

同ウ

○あしせし

十四ウ

○さんせん

十五オ

○あてせて

同

○せに にて將然言よりき志にせと活く例

十六才	○ろ、らろ、
十七才	○すう あは 附せさんと/or 別の詞又非る論め
二十才	○又 ひうせき勢
二十一才	○又 ふうせうき
同	○又 ほる さひる せほひる
二十二才	○又 四種活よしにる さひると轉る定り
二十三才	○又 然されどいふを正しめ詞を思ふをあそ
二十四才	○又 すする
二十五才	○又 せぢへといへもきれてほくぬ事
二十六才	○かよひれ ひそむとあるの活よづきて意得へきあやしむ

十九才	○また キは 、將然言を受ふと連用言を受ふといひあめ
二十才	○つね 下ニ段 と活く語ともれ古くは四段 と活きしレバと覺 べきゆう 又それとくく たるもあらあら
早才	○四段 と下ニ段 と又中ニ段 との三種 と用く言も有る事 ●あれまで此をちくとも諸の行へこまく論め也
二十一才	○ひく いくろ まくあれ
二十二才	○とく
二十三才	○まくまく まくあれ
二十四才	○まくゆく
二十五才	○あへま あへ あえの別

朧方 ○盈々

同ウ ○せめく

朧方 ○けろ 来字の意比詞

同ウ ○蓋せろ

●これまくは加行につきての序説め

朧方 ○給をれ 紿をれ

同 ○たこせろ とりふもよろしきまくあや

朧方 ○あそれ

朧方 ○かよまく らよむ勢

朧方 ○いまく

朧方 ○れたり 佐行變格の活きとけりゆへきを例め次

朧方 ○又 まきくはしきとも

朧方 ○れたり 附おなまく まくまく いまきぬ

●右も佐行につきての論め

中卷目錄

朧方 ○四段の用き比第四音よりあまはせし活く語

●右も加佐多波麻羅の四行による論め

同 ○みつみつほ ニヶ條

ニウ ○ぬきつ

ミウ ○もみ豆 もみ飴にニケ像

●右尤多行つて比ぢや

五ウ ○ぬ いぬ あぬ

六ウ ○奈行ノも四段の活有リがと賣ルきをも

●右尤奈行

八オ ○たふと傳 あふとまる

同ウ ○れ丈ノ四段と中二段と二方ノ活くよル伝佐院免

九ウ ○思ふろ

十オ ○たまふ たまふる

十一 ○又 給ふとたまふるとの寛狭

十四才 ○又 先ち思見聞シム限リれうル比 譲め

十五ウ ○又 みまかミマカとりトリ賣ルわル

十六ウ ○被ひはらへハラヘ

十七ウ ○みま みまる

十八才 ○うらふウラフ

十九才 ○うきふウキフ

二十才 ○かま かむカム

同ウ ○乃夫 の体 の傳の差引、

廿二才 ○又 述字シテシマ當シマと延シマさうシマ免シマ

同 ○あこなアコナま

△ニウ	○みと姫
△ミオ	○たくちふ
同	○あちもふ
△ウ	○めしらふ
△四方	○ひる ほに
△五方	○志子あ 令字使字をとふ意と語の活くやう
同ウ	○た乃む みのむろ
△六ウ	○うちむろ うみうみうみ うみうみうみ
△七ウ	○あくろみろ

●右文波行式つきもの論

• 右文波行

△八方	○あゆ
同ウ	○くゆ
△九方	○こえ け
同ウ	○もい もえ
△十方	○こい ひい
同ウ	○むくゆる
△一ウ	○あゆ あぬゆ
△二ウ	○也行 也四段の活きもなしと思もう事

●右文也行のうへれ論

北三方

○いまそりあ いまくらうも同じあく也

同

○れるく 古今集ある歌をあやまれる解釋なる事

北四方

○ふろく くらうく くらはいる

同ウ

○たそり

北五方

○きみ 霧を用言といへる例

北六方

○むまき 聖祓用 いへる例

北七方

○みそそ

同ウ

○はくた

北八方

○のり のひ なれ みづ

北九方

○けろ

•右大羅行ヨウおまでの事

四方

○まご 家カミ

四方

○用字ヨウジ當タマる詞

四方

○ひきみ 和行ワフ中二段の活ハナたたきてさ陀

四方

○くわ は

同ウ

•右と和行ワフ於て

下卷目錄

勅丁方 ○形狀あとはまつきてたすまでのお院

同ウ ○くわ は 活ハナあく か お は 活ハナ紛ハラハラ事

ニオ ○古き物も希々あらへ見えたるゝある事

司ウ ○は志時 ニヶ條

四ウ ○あめし ニヶ條

五オ ○かくくなし

同ウ ○うくてし

六オ ○いちあるし

同ウ ○おき陀志

同ウ ○やうやく

セオ ○とし 茂字コトコト詞

ハオ ○ぬふやし

ハウ ○のとあし

九ウ ○れあきし

ナウ ○又 れは ふに並

ナウ ○いとなへ ふに並

三オ ○あし

同ウ ○何けく

西ウ ○又 ケ 何やう 何らう

五ウ ○又 何けく 何くく

六オ ○又 何くく 何ゆくの類

同ウ ○あくくし夜 あと諸活語の體言へ連る所の圖說

西方 ○あたうし

五方 ○むれし何をむか何ともいへる類あるえ六佐陀

六方 ○見あほし

同ウ ○らしどりふ詞の用言とおほしきたるあや

七方 ○又 附^くうへての初めヨ^ルハ音をあき事

九方 ○見らしの類と何處^かの如きとのといふめ

三十方 ○何まく 何ぬほし 三ヶ條

三三ウ ○老らく 見らく

三四方 ○又 うくといふ語をきろく語^ニ添るも漢文よみの習ひ^ヒみす

五方 ○漢文の訓

七方 ○けせてへめれよう。もとづけも訓むきしき字^字も

八方 ○又 榮える 勧える み肖える^{ミモズル}類を混^{まつ}て意うましき事

九ウ の解^クれる 補^シいるの類

十方 ○以字がみてとよむ事

十一ウ ○はみに

同 ○かもに

四十二方 ○あみに

同ウ ○けみに

四十三ウ ○まいに

四十四ウ ○まいに

四十五才 ○ほりい ほぢい

四十六才 ○字音なうじやうて 活き語トナリオノ例小有ニ書

四十七才 ○種々訓讀乃事



白山

口栄上巻

人言語のことを何くれとうるこゑヨルそ三のんちめあく思音を轉用す
差別

一コはもくきあくもかたのく用きつゝある所言隨ひつて必その音代連接うむる

二コはみことあふくあくうあひくなる其ことろのこゑよりておのづくらく其音のくづる

三コは用言軀言ともよくあらへくことのさうめうりうつけある

五十連可然音韻相通あふのこゑうきとくよへは用言軀言の類すへて名目めけは事ともとは是より下皆漢字例一てくきこんとくそだくくく字音よむへし

此三たり然るユられをも皆おーあへてく五音相通、こういひてあり

くのみ意得ためたなとその轉り出る音コトよりて意もへの異あると
同一きも其範混ひてことのちろばとくんもつひはあやうしてむ
うむることもやうじんちきを以て詞の林の眞コトナレいさんとせんとは
まう其山口ふしてあれらのすちくばよく辨へおくべき事とそも
える、ゆゑを科學の徒の中にはとうとみくらやまるたまひやお
ほくらんとそれいとくろくまう思ふはくふうのものかく爲ス
今いきまうきをうせんとくまう○一用言の音れうあくじあもくはる
と其音くよト其言は意もこくろく事也そもそも用言くよ人皆
の常、おのづくいいひこうちをる如くみとへたけくきといへ用
きうごく用きうふあくやう用言トテ用言へたくあと大かる哉用

連

又これを用けといへて、已然^{タマ}ことは又希求する言世^セへたる^{タマ}とあり

用^{タマ}んといへて、^特然^{タマ}然^{タマ}らんといへる言とあるみくひをり^{タマ}下知乃詞^{タマ}とあり

きそをつめて、^{一日}又和語說略圖とて「ひらうものせろ」^{タマ}それをたま見たものこと^{タマ}よく^{タマ}ぞれぬをしげて、く活用にる類ひくさく^{タマ}比例

ありくはくと詞八衢といへる書^{タマ}て意^{タマ}へき也^{和字正濫鈔}^{タマ}とくい

へることくく見えうれと別^{タマ}意^{タマ}て、^{タマ}先^{タマ}事^{タマ}をやう^{タマ}、あくめくうし書^{タマ}、語意考和訓釋の大綱^{タマ}振分鑒^{タマ}活用抄^{タマ}とくなら^{タマ}又あくひ鈔^{タマ}とく書^{タマ}立居^{タマ}と名^{タマ}目^{タマ}とくとくいへるもいわゆる用言の事^{タマ}也^但し彼鈔^{タマ}立居^{タマ}とく五の卷^{タマ}何身^{タマ}とて
あくへくる^{タマ}限りでいへきくさう^{タマ}いうふそや覺^{タマ}る事^{タマ}もそ^{タマ}外^{タマ}も屬^{タマ}といへる中又
家といへる倫^{タマ}といへる隊^{タマ}といきる^{タマ}あと^{タマ}いと^{タマ}用言^{タマ}とて、^{タマ}鈔^{タマ}の名目^{タマ}は立居
といひ^{タマ}もあく^{タマ}あく^{タマ}みなら^{タマ}ひ^{タマ}鈔^{タマ}みくへる^{タマ}う^{タマ}し^{タマ}鈔^{タマ}うらわ^{タマ}とく^{タマ}ち
て出せる^{タマ}コ^{タマ}あは用言^{タマ}あり^{タマ}又^{タマ}あし抄^{タマ}の^{タマ}つを^{タマ}出せる^{タマ}く^{タマ}の事^{タマ}とりつとて
もの哥^{タマ}との傍註^{タマ}をみる^{タマ}うれ^{タマ}あしといひあやひ^{タマ}へる^{タマ}もよそひと改め^{タマ}へきも
あり^{タマ}又^{タマ}ひといへる^{タマ}コ^{タマ}て、^{タマ}あし^{タマ}のみり^{タマ}へき^{タマ}ある^{タマ}也^{ある}あゆひ抄^{タマ}
端^{タマ}とくこと^{タマ}りてもうなれと紛^{タマ}もく^{タマ}て、^{タマ}あ^{タマ}う^{タマ}うれとある^{タマ}ひ鈔^{タマ}も

あし鈔もにてたといふよき書つてゐた。八ちまくもととあれをまれへるかのそとその
せうりの人の常よりみゆるもあひことありして又裝鈔といふものなり。あれとまた
見たる事あしされとあひ抄の端によそひの大むねとて何やくらやといひそれう圖
をも物せるをみろ。コトハチキもかゝるもの書つてつきなんとおもられてそのいさを
一さいとくとくこしまうえあれと今誰もみて学ん。エは八ちまくもとおもれてそのいさを
かくハちまくえ上の件の諸書よりて、マサを大成したる書とこそたくへつへづれ。但し
猶圖しどもしらけのこせる詞ともあきつ。ほんじそもうけ四種の活用
の圖ともに准へて考へ知るへし。友鏡底廻影と名けたる書。
エト思ふれるを集へおきたり。さて○ニコトハ、躰言あ
くら二語あひ連る。そのことあれば、必ずよりて必其音の轉るといふを天地
のあを。天原あといふとき。あふ。ト^{ウツビ}轉^{ツル}といふ類をいふ。これも正鈔鈔
とりふを男声。あめ。ト^{ウツビ}女聲也。とある如く、躰言剛柔の別こそあれ、用言のちくと音^{ウツビ}從
ひて意も轉^{ツル}るといふ。異あることなるをくくる類を以て用き言と意する人あふ。そぞえ
くたへうらぬ誤り也。但し音の轉るまゝく其言の義もくらむる。やうらる其故を天
少女あくいふを下界のをとめよ。ハシヒ天上のそとえくみは詞^{カタ}。あまといへる。て説を只
ひくつのをとめをいへる。て説をあめ。つちといふときの天と地との二をいへると、やあも
むき異なるを知る。へし加の行^{カタ}ても酒とあけのみをひくろせをうやさけふねと。金番
のあを。天原あといふときの天と地との二をいへると、やあも

あ。あれといへぢ。それとも異りてあけ。入るふねと。槽^{カタ}をひく詮^{カタ}とある也。奈行^{カタ}とい
ふ。金と槽との二をひひとつ^{カタ}の名す。てり不^{カタ}とかねつちといふをとて槽の一をひく。あ
き木の^{カタ}あくべとえうみて金のたるをひかをうとうか。槽とえくはも内典^{カタ}も依生と目
えうや持業^{カタ}といふやせば。ちうひ槽^{カタ}。あめ。つちあとも相達^{カタ}。とく筋^{カタ}とくろと
せされた女轉音^{カタ}。格りよ上^{カタ}いひつる用言の活き動くこと。いふ異あれ下^{カタ}
りふ音韻相通してたゞくびとをともりくまく。類とは又いと異あるをみつ。信しちて此
類^{カタ}又種々の例あひけ也。丸そ五^{カタ}分はく。欲^{カタ}は先づ^{カタ}躰^{カタ}とて。六四
音^{カタ}としよを語ひ重ねていひて。うなうは第一音^{カタ}轉^{ツル}あひう
れ。あめを。うまといふみくひ也。目をま。丸をつま。といふちと皆かへて知るへし
しづくのみそいつれも。准^{カタ}て其類を辨へてよ。これを五十音^{カタ}考る。小うさだあはまやら和乃
九行^{カタ}とぞうて皆ひる例あり。加行^{カタ}ていた。竹^{カタ}をたら。管^{カタ}をす。う
といへる。あとの如し。佐行^{カタ}てた。弓^{カタ}をわざ。風^{カタ}をう。の如きこれ
也多行^{カタ}ても手^{カタ}をた。奈行^{カタ}ては稻^{カタ}をいふ。波行^{カタ}ても苗^{カタ}をかた。麻^{カタ}

行^スても^クは天^スをあ^ム。かと^也行^スても冷^ヒをも^ヤ。羅行^スても末^ウ。
をうら[。]和行^スても音^{コロ}をし和の如き此類ひ少^クし。阿行のみ^スは其例
音^スすへて言の下^スつぬ音^カれも^ナア行の音^の言^ハ中下^スある^ク如きもたまくみゆる
をよくみれも重りたる言^トもあり其事^ト於乎輕重義と名けたる書^くく^くいいが
きつきて右の語格^ヲ明^ルにつきて益^シをうること多したとへも^ナれ嶽^トふも^リ、如き
發語^ヲ濁音^{ある}その^トちやひ^レ尔^の右の語格^ヲ考^フる[。]古事記^ト多氣^トう
けろ如^クそ^トは清音^あくしこともま^くそ^トも^いも^やる射^スてはたけ^トいふ詞^ソれ故
りさわ詞^フはたら山^トやう^トりさるか^トに即ち万葉集七卷詠雲哥^コ月嶽^を由櫻我
高同十春雜^モら月我高^トもうけろなり然れど^トたけ^トも^一清音^たく正^シきあ^リ
とあり或^モ万葉二十卷^ニ伊波妣等^トある^ダ家人^{ある}ことをう又青白^トう山^ナてあ
のう[。]枯^タな^トこ^トを明^ルか^トすへて古事^トく^く便^リと^ナる事多し但^シ枯^タき^ス
か^トくろ^トいふ用^言故^ク枯木^うれき^トや^トも^いへる[。]然^スその^れを射^言とあ^リての^ミへ
みを未^タ群^あとのう[。]むら^トうつる^ト同^一へて右枯木^あくも^う木^{とも}いへる[。]例^もある
か^トう上^ト出^セる[。]冷^モ其例^トでも^くも^い用^言あ^キら^ヒえ何^モいへる[。]あれと^それ^カく又
うつる^トも^いや何^モいへる[。]其^トうつきて今^モ云^セて枯樹^をも^うき^トり^ナ。古
語^クれき^トりふ^ト後^の言^トも意^トへ^クく^く又^クれき^トいへ^ト用^語の^カく^も思^フへ^ト
す[。]猶^ウれき^ト射^言いへ^トものあ^リこと^トを委^クは下^卷云^ヘしげて群鶴^の事^トを万葉
集^モつるむ[。]といひ列^のことを常^スほ^ム。といへる[。]たと^モむれ。つれ^トそりふ^ヘき^カみ

思^スたるれ^トくの^ミひあ^リへる[。]たま^ク意^スか^クへき^一例^也又^アま^の原^ハの葉^ス
か^トあ^ムす[。]其^トは^シ其^トを又^アと^トてもうけ^テれ^バ方^四音^トてあ^ムす[。]けで^アね^シそ
う[。]そ^トへき^ミ思^スたるれ^トさ^のみ[。]えき^トう^れも^くろえ置^ヘき^一例^トそ^トうる[。]たく
ひ^アい^リ尔^ハ半^トの助^辞してうけたる^トはやる^例と^えてな^ーま^うら^ヒ只^オ四^音以
う^くう^こと[。]也そも^くれられ^ばく^くめ^よ其^ト少^シト^なま^くと[。]太^ト尽^トく[。]
尽^トく[。]う^くう^くみ^くひの事^トも^と又^別へ^シま^くく^いへ^シして二^トはつ[。]
射^スと[。]え^オ二^音いへ^トの^詞をつ[。]れ^てむ^う射^言と[。]る[。]と
きた^オ五^音つ[。]ろ^うち[。]ア^リ樹^蔭火串^ホ前^ホ老^父糸^ホか^トの如^シた[。]し
う^さた^るはまやう^ルの九[。]
行^ス涉^リて皆^{ある}。三^トは^オ二^音ある[。]を^オ三^音つ[。]せ^る。月夜[。]
神風^瓊矛^アある[。]如^シ。四^尔た^オ五^音を^オ一^音轉^レ。白^スを^アら[。]之^をある[。]
といふ^如し[。]神代紀^トキ端^此云^{多那須衛}と[。]あ^リひ^ト水[。]泡^をみ[。]矢[。]木^をあ[。]
趣^キ々[。]叙^ケる[。]あ^リも[。]此^例そ^トよ^く解^ラれ[。]か^シ但^シ言^語種^論といふ書[。]射^言用^語助^辭
形^状と分^ちたる[。]漢^字を^大形^狀作用^声辭^物名^ト別^くめ[。]い^トう^う覚^えて其^大う^ニナ
く[。]思^スた^るを^然う^つ説[。]それ^のも^ア助^辭な^れた[。]上^の件^のう^つ射^語の轉^音の列[。]
を示^しつ[。]に出^でて[。]へき[。]あ^リぬ[。]如^シこ^トを必^見と[。]む[。]人^{ある}へき[。]う[。]お^く

へきたにて此書アマガシこそあらゆる詞を只ニヨリテ正一き作用の事もあれ形狀あるぶもあれ助辞もあれたゞ搖く音のそへるをもじて皆活き言といひそれ用言と名けまゝいはき物の名もあれたゞてよをもの類あるもあれすへてうへてこゝるきをもあらくみこと大駢言と目けて何それともあらふ事あるそし此書アマガシてを巻を終る迄至るまでおなづく用ある事アマガシあれぞくきてこゝる事そのうち五つは方三音を方五音アマガシつに眉アマガシをまよといふ類これ也古事記中卷アマガシ麻用賀岐万葉五アマガシ患麻比麻欲毘伎アマガシをあらぬといふ疑ひもあらぬへれとかほよの音アマガシを用ひるなるへしさむと証大字鏡ユ代黒萬与加支アマガシとあるとてあきらうあるうへ用も欲も古書アマガシの音アマガシ用たる例のりた多うれをさへて凝アマガシへきアマガシにさて和名鈔十八アマガシ鷗アマガシを比衣土里アマガシにあるつきて正濫鈔アマガシ四アマガシひよどりアマガシ俗アマガシひよどりアマガシ蘡鳥アマガシの意欲冷鳥アマガシの意欲と云う思ふアマガシ朝黄アマガシをもよきといへるかとも同アマガシあるをこれらよりは方四音を方五音アマガシにそ又の例アマガシも云へくや此外アマガシもあはりたる例あらんもあらじ今すきみて物アマガシ見えたと正見やることをまつ五種アマガシうち方二音の方五音アマガシつるアマガシ大アマガシ必まうかのつアマガシつるアマガシと覺しきを其アマガシあるた月夜アマガシつアマガシつアマガシよといふくアマガシおほく白雲アマガシをあらくもとはいへても右榜アマガシをあらうといひ黛アマガシをよよきとはいへれと眉アマガシナアマガシまよすアマガシとりのみアマガシひよどりアマガシあとも多うれをこはうアマガシ男女声剛柔アマガシの別アマガシきくアマガシきアマガシえうにちめやうの例アマガシとも家人稀人アマガシをいたひくアマガシひとといふアマガシは限らぬ

いへんきん人アマガシもりふみくひもあきアマガシはあらねとそくあはれアマガシて方四音を方一音方二音を方五音アマガシつるアマガシれアマガシ黄金アマガシこアマガシひはきうねアマガシいぢれ酒槽アマガシをさけあねとやうにちめこアマガシく皆大アマガシ格例アマガシおのづく定れアマガシされアマガシけせ。ねへめえきアマガシひ。あとあたまやうひと轉アマガシかとアマガシみへて右のちある三種アマガシをひくアマガシめとくアマガシへううちアマガシ思えろれと左右五種アマガシ其音のうつれるかもむきかくみアマガシ似たれえアマガシういつた一類アマガシの中アマガシての小アマガシうれアマガシくアマガシ思えアマガシ此五種アマガシ皆連り接くアマガシてアろれアマガシみアマガシよりて必アマガシう轉アマガシうてはえあらぬ自然の格りある轉音アマガシの例アマガシた。さて昨日今日のふちいの轉アマガシ此アマガシうつれるアマガシへいへる說アマガシよるときも是等アマガシも必ず轉アマガシたる音アマガシのみのふアマガシ定れるアマガシれひとつの例アマガシありとも廻アマガシれ、外アマガシある類アマガシありとも観アマガシえされたあはれ轉音アマガシの類例アマガシはあじうし又アマガシ年アマガシをとせたりとアマガシて其アマガシるアマガシをよむときアマガシ限りアマガシと古事記傳十三卷アマガシ見えたる說アマガシてよく聞えたりうれらアマガシをしも又ひとつの格アマガシ轉音アマガシの例アマガシトリふまいみアマガシきひうアマガシとそれてこアマガシといふ言アマガシの意アマガシ同書九平大年神アマガシアロアマガシ歎アマガシることもけよとそもえそアマガシれアマガシみれた正溫抄アマガシ五アマガシ三十アマガシとアマガシせをのみくは矢橋アマガシの字アマガシをクリアマガシてうぢるアマガシとそきアマガシうづらアマガシ若雷アマガシうぢれアマガシとて若の字アマガシあらる言アマガシのへてえきアマガシといえそアマガシもあらぬ如アマガシふんうさて○三アマガシは用言駢言アマガシも必アマガシの定りアマガシあくてたる脣舌牙齒喉

の五の音こちふ又を阿伊宇衣於の五のひ韻きのうれりきとうよへるありそら
まつ射言フてたか虹かぬしといひ木きをけ火をふ。いきをおき
といへる類又物の名あらてとみムをとをもといひ類いと多し是等
を皆その行りくこそ豎フ其音比あひうよへる也歎筋フてもうれ正濫鈔フ
のうよひうそ伊咲えの意欲ミ取ける我えウいとぞウとそ亦さうウそウ又ウされウをあきつき次をすきといへる如き
え横フこのひ韻きのうよへる也又用言フてえ。やまふをわやまふある
くをあらくす。みやんくをすむやんくといへるう如きも豎フ其音
のうよひ消フにをなつさやくをさよくといへるあとも横フ韻の通
へる也ウろをアそ五音相通と名けてどうくもりあへくをあふれ正濫鈔フをあたい
へる也ヘと此通音と必の轉音とのうちめあともあつうけろ語フひ見えたクれ
四卷フひえ鳥ヒ鳥のういは五音通せりといひ五卷ナシ四十三ヨロ一イる。うるうる
一メうるアくをしふとまは同韻フを通すとやう二音と韻フとをきへきもいへるを復

四卷フ愈えいも崩えくやの解フくも注フくあらもううレとやう
コヒるも活用の言フくも吉ヒ通フうううう分フる。造語フもりふへきせ。うく豎フ
も横フもらひ通ひて其音のみを聊フうまれとその言フれあもじき少
少フうたきるこくたきは上フいへる天アマをあま。声フこと又黄金キラ
をこモ。かとれ如フくモ。いはくモ。へきとの格フり或フニ高モ。其格
うるこくフはうフに但フしこをくと云フて。あつことまくいふあシきとこ
ろとえくみう。くとほいもてうろくといひてあらへきとうそと
ちこめつへきあとのうちもかのうモうねとそは只文のひう
たよどりて其處々の詞フうひのきをのうへり。あらはみれ詞フのまう
へなとよどりこひしてめくさくまよ。轉聲フとはむくよくことせ
きて又きいくう。此音便フ乃類フとまく別のひとこところうへしきい
くう

とも秋田^{タケダ}甚^{タカシ}の類お附^{タタキ}るをいふこあたくひうてき。てをまそあとすへてきくよたにしそもいつれし正一^{マサヒチ}き言のすみ延々^{ヨリヨリ}やうく、よこあぬりもてゆく音便^{ノイヒ}といふとのて上のとく^{トク}の^{トク}へる活用轉声通^{ハツシントウ}音の三^ミとくみれ又別の事なるを、さてあやう^{アヤウ}とてと豎^{タテ}音をうつス^スナ^ナ横^{ヨコ}韻^{ヨン}を^ヲ通^{スル}てとく^{トク}任せて、いうちみ^{モリ}へきうやう^{アヤ}アヤうちう^{トク}然らにみとへ天原をあぬのは、とはいへと天石屋をあめ。比^{ヒメ}いたやく、ひてあまのとはいもぬうかくうひもすく定格^{ヒメ}とはあき通^{スル}てもうをいふ。ひをいふをともいひへきと^{ヒメ}魚^{ウオ}。又同韻^{ヨン}の^{ヨン}てうなきむあき^{アキ}をうよへる例あれとうりとてそれを又ぬあき^{アキ}はさく^{ハサク}いふへくもうきるをくにへて何事も、^{アキ}へみ例^{アキ}がまうくみく^{ミク}りコ物にまへてくから派^{ハサウエ}用言と射語の轉音^{アキ}と五音相通^{スル}のうやうは、しもこと^{コト}こううが用ひつ古くよのみのあとそ上の件り^{ヨリ}いへる人のことをせうつるアヌ^{アヌ}九そ三のんち借^{カシム}車^{カーチ}ある

此例をよく考へていうてそれよをよらんとせぬもあはへう^{アヒ}るときたり、猶^シみ相通のこと五十音^{ヨリ}てきゆく五音のとうひ^{トウヒ}隣近^{リヨウ}はおへをよくせぬ^{シテ}きも老い^{シテ}といくかくとひとつ例^{ヨリ}そある書^{シハシ}とあるしきとだく^{シテ}せう或^シたすかとたまへとはハビラ^{ハビラ}の通音あれ^{タマ}。とひえたまふ。りふことたまあくたーといひてつひづらやことあき法門の上^{アシ}えもいぬひ。こうろえたる人あともあうそしうれそ^{シテ}あくへり^{シテ}かと辨へおくへきとせきて五十音のうち司行の音^{ヨリ}三音あち^{アチ}四音あと^{アト}うつる音の事^{モノ}そあれ^ス活用され^ス潭音これも相通^{スル}と^シき^シへきあう其^ノ次下^{アシ}別^{ハサウエ}をたて、り^リへけきく^{シテ}ひとつり^{シテ}若葉を^{シキ}葉^{シキ}とひ稚^チ子^チが^ガま^マす又^{シテ}子^チともいへるもいさくかそれおもむきもあき^{アキ}う^シきを^シことひく^{シテ}語格^{ハシガ}のうることこを^{シテ}いふた^{シテ}普通^{ノイヒ}と^シことを^シう^シあらを^シあらを^シれば^シ來^シ字^シあたる用言^{ハシガ}きく^{シテ}活^{ハシガ}動^{ハシガ}くと司^{ハシガ}こと意^{シテ}えた^{シテ}トんかともあやあうといふへいさんや若^{シキ}か。^{シキ}かと活く^{シテ}あと^{シテ}たえてひへきあうぬを若の事^{モノ}當^シる言の音^{ノイヒ}を轉^{ハツシ}る事^{モノ}あるのみのあとそ上の件り^{ヨリ}いへる人のことをせうつるアヌ^{アヌ}九そ三のんち借^{カシム}車^{カーチ}ある

ある中より其はくわんとあるのをくらへすちくよひと
文字のみ書ひていたくそのものおもむきのうそれるあこ
ちこきてもたいしよ意得へき事にてむうしれ書とも見えたる
えくあくわうろくあくすへて正くものつういと雅ひて正をして
き格りあるが降きる世のいみく意あくろとは見えて文章上
ろしこじへきく中ともあたり此所をと思はず多しまでむけ
の近き世を歌のじく假字つうひかもむる世のを拙してつけ
いと正けくろし昔のみ学ふくに筆もく少くわづかの詞乃
活用のさぬのみくか因意を用ひされもう初学者徒をゆくくの
もく世不そ名聞えくはくよみ文書きくもむられもうれ古く

のいとくわきよたるのみもく八代集アリ過てもううけ後の書
ともく見えくはそれより比へても猶劣りくちくでほく西うめたるもん
あまた見やる月うれくきわきたる抑詞の文字らやくはくひ
たるはく清少書をわろき物乃まらまくめぐれんやくヨリア
唯文字一そあやくもうてもいきくともかくものうくわれ
惣て文をうきては云へきもうく歌よまんもあほく漢籍とも
のくよ物せんも深く意が用ふべき行詞の舌きはぬなる傳しきの事
させんせいさんとんといふをと文章を失したんもいみし
きをはくらきれ文字アモモサの故をあるぐくのこくがいふと思
ふくそれうなうみううれ意よてひようもくの事うきくなれ
自

かくこゑくこうじまうひせんをいとむちばしきうちんたし
う思ふ人あは此辯明めてもえあへしうしつれをよき惡きと
え知るコウジトんとえいもへまあんうもつべきやうあれとた
さうち覺ゆるまゝ世人のよく誤り物にろ或もといひ、彼此論めをほ
うあくくたゞくおももろく又漢文の訓讀ともいかへきても此用き
の筋みて意え置へきそれらばうれやうれやとつきぬをうくい
あんもあくつけてこれあそれもいあんはる里へ出んはる
あといへんぬきひあらもとちしも評むる人のあらんをまちうて
らのいとあみそぢはそれによつてさうく見んと思ひて

用言くらうぬ詞の音比轉るとのばちめ

ある書に老お^{カイ}をおよとも活く例也とひがむ轉音と活語との別審うれ
うてトろしかづなへ五十音の中かのをきの音そもく此をちめん用
言のはくくきれ音をその音くよつて其言の趣も異ふたる也
又く射言の轉音をあくべられ故意えこうたん爲マサハラら
く漢字カタカナとあていを死字活字とうふらん中小いをやる用言にて
けくきとりふきりもた活字とりふかあく射言くいふ
はうの死字といへるにあるとあるとある告し又いまほくうあくはう
いもくうれ虛字半虛字カタカナと名くめうといふアリあくはう
えのそ語助助辭モロヒシキれを声辭字面カタカナをといへう中ても今も用言くい
ふへきもううじへて靜動とくらめうその動字カタカナあたるをみれ

活き言とりふへきありさて實字物名字
而あくといふめるゝ當ろぬみ
軀言と名くる也但し其虛字とりふある言も軀言とりふへきもあるがれ
用言とりふへきをあしらふのみあり又實字うつたる言ふ
定められと今も固う文字のへば論はあそそて此語の軀かたちをりふ
ある。あくらく漢字うなづ其實字うつたる當る言れ中にこれかたと之の
うつむろこゝもられとくれば虛字うつむろあるまほこととの活きのさみ
とねすく同じやうにさるをされ老をれよともあいともいへる
詞の活きと意得其外声。居。こそのみうひとひゑはうのたく
ひあとひもひとつ例のといへる説アハタチと皆ハタチおろそうもある人
のうへせら書ハタチ五十音の行りハタチたりて社軀用令助とい
るこゝに示せるといとあらくしてらう就ぬ事ハタチみあるにいたゆ

る八衢ハタチ四種の活きとてあらえせるはうむろそうちをよく改める者
とみや然るをちうき比又此八ちまハタチマとみあく五十音のくまくま
くまく四段の活きハタチ中二段活下二段活かといふへききぬはたうあ
るを皆後の訛ハタチたとくむる人ハタチいて來よためもたうれしきれ
さありとて、初軀用令助ハタチりう人のいへるがみふいみしきれ
ことなる事今といふ明く解きる世ハタチをや又ある書ハタチ荷ハタチを能
といふえハタチカニ音のオ五音ハタチ活く例也といひ又らる書ハタチ壹岐ハタチ
きともいきともいふもくひと老ハタチおいともおゆともいふもくひとのば
ちを辨ハタチひとつまうへたるたくとも皆うれ初軀用令助といへ
る説のをく當らぬことのう事が辨ハタチぬくもくへし。お。お。といふ
えの活きの

うそどアラアリコをおよと令集解ニあるぞと駄言の轉音ありおうるをおよとお
いの活きといそんを古事記ニ月弱王とあるが日本紀ニえ眉輪王とされを見
ナセラセヨとも活きて用言せといそんク如くモはシ
あくたるよしと漢字の虚實死活ニ當てもあどろみ

又

古事記ニ伊毛波和須禮士とある狀ときて礼を書紀ニも遷と云々云纂
疏不可得忘也と註せられゝるを遷と云ふ。の意も見給へる
ものとて誤あり遷ニても意も云々れ。あら此れと遷とが五音の通也
といへるを精しきれをへてくく詞の用く所も五音のうつり定くる格あ
りて漫々とよもり云々りのうつり其轉用とちくひて意もうつる
をのなれど也然きは忘れ。をからし。こも通音の故ニ云々に別
にもつけ活用とく隠也云云古をかくらんかくらあともほくひる
に

これらと同しといへる解釋也古事記傳十七の八十ア 活用の言とく音の轉に
又四十三の五十九丁 活用の言とく音の轉に

のけぢを明すいとよー又記傳三 十六卷 古事記の伊幣勢許曾をいたせれ

もこの意にて婆の省れどるゆくと云く處ニ伊波勢許曾とあへきに
伊幣とある幣とて通音のみあきとかる活用の處をいと精きとの
とてみくらにうよもとてはいもううしこと也と見えどるやくともは小
名とくは人の説みて初射用令助のひことよもあもあうまきれ
さくほのひそひおもく如く古くもいとあやーとせゆる釣つうひの見え万葉元卷又十
四卷あと云はてもおほくもやうかれとそれもくく考あれどおほくもそとくある漢字
の音の雅俗古今のたうひあとよく事うて大きくいふうちへき活きといふへきもあきう如し
そのよーあは古事記日本紀かと何くれの古書ともよもつきて近へてをえ別がうくいえん
とおもあうそく中右の伊幣勢の
こも中卷の初ういきういふをしあうるよもあうかくにくれてくはしき人の
うもせら書ともある中右は猶此詞の活く筋をもうやまでり

今も明々見あらるなんをくく見えうるにてもこもれあらり
意得あくへくらうあることくうふよく思ひへしかほいも、今れ世古乃
假字つひを正しゆく道のいと明よがれるよつきてもけきく此みち
をひしきし契冲阿奢梨かとの書るもの傳れるにさへ今みれを
をくく此假字はうやまそくとみゆあくまくてものみ意をくろし人
々のも世よいと名高きはうせうちといへどもそのうかくひのみくうる
もくきよいとてとまわる信ひる意もあさくあるこくちれくろう如
く今より後よくく此詞の活用のじぢれらぬやうにありなん世より
今をくへり見たんすなきことそくくーきものゝ見そくめつて伏おも
ひてくへくーも意をうむへきことはあくにややることくふやく
ひくとも別々さし

はがいそ又いよのにさきと
名けたる書等よくへるる如し

中二段と下二段とにあく語の事

同語あくうその言の活きかぬのみあく方よきうて或も四段と下二段と
コ活ハタクうり或も四段と中二段とコ活けるもられとくう此トーと
ハ衢コつもくあり 行りを異フ^{ル事なり}活きかぬをもりへあくう意もあくう語ともとあ
とそは誤あるト^ルすれどもち 同作の詞通路上^大見えたうさて同書又^{行りを異フ}せんし中二段と下二段とコ用き
て意同しき詞をあたよ^ルにのへるもくもくきのうめと称へへき也
されとそはな^ル考あれ^ル概^スもいひがきをうる寛あふま^トふ
ともえをもひ^ル活く語あくもあれもあくに云へし

つねよく誤る活き言とも

さんせんと詮みうひをあやまつせしとあらとせてとちてと又
もそと活くへきとらるくと活くへきと或もにるとけしるこあれ
られぬひたる事ハ代集の比までを見えて後の物奇あり文詞等
を少きを追き世文章とぞはあやあくうたなきへきりくこうくひうめめてゆけ
も初学の徒あはさうちまくあきぬをうりいと紛れしとくあり
くくく猶何せと何すれともとも互に誤る多きそくし

あしせし

あしとりふへきとせしとりふへきとのといためハ衢上卷四十に○他
行とはまきろく辛あきが云えとねんころよ示せる處を見てよくこゝ
ろえ置へしさてそおいへろ如くあしとりふへきをせしといひある

れること世に少くくなを此事をや明めめるにつきてもそれほく
へく必せしとりふへきをあしとりふあらまちもうり物せしとい
をき底物あしとらやあり解せうなとりふへきを解あしとはとあ
やキつみくひ意をつけてよく辨ふへしさてハちまく上の四十二 いへろ如く
にへて四段乃活語をオニの音きあちひみりけ六をアソ過去のし
うても受る格りかれもし考四音せをしと受きた下ニ段の用きゑ
ある也されをやれても申せしと見えらゆうけそはハ衢と辨へとあ
如く但し千載集哥のも書くといふ少しほうしふと書誤るもと知るへし
竹取物語ひねじみのくことをいへる處くあるひの金すかねとふくち使つか申あつは
はもうけいう物くもへてうひたりとく申あつはとこそ古きもく

すれの本スもうちを抄本スも申せあはスとあるをあうしらひ誤かることいとあるしあそくヘてよスとス凡て申と云詞をシと愛スはル申シと書て申シ。とほをきく書めシとあれシ其申せシとがうんもれ此鈔本の類の誤あるヘしといよクあくられシさて大和物語一本ス逢事のねスふシたクぬシをなスくヘせシ時ス恋シきシとみえたるあともえシの写誤スるヘしかるもくヒみシ准スへ志スるヘきアり其中ス真字書シのシてうちスる写誤スと覺シきシをさくヘかくスれとシをシきシありスれとシうシ写誤スる事スを同書の内スおシ類シひの宣命スれシ見シあシるヘいと明シなる事スて即同書一卷ス十

同上卷六あるをみよ御事スも全く同一シき宣命あるをいつれも御宇ス之シとありスるのみからシけシ四十五卷四なる宣命もその詔詞の中スてたゞス平安宮ス御宇之倭根子天皇乃云スとある處スてそこの字スをうちへきシく入シるのみまで世文字スあシうシても思シへしそのつきの文スある御宇セその世スを誤シりて衍シくる字スをうけシうシてあめに下志シしめあシしのみよシむへきシてシ明シきシあシいやそもあシをせシしシこうやまれるもふろき文スはうれシをのそきてはこくシく見シえシる事ス也然シ今シよシあシどシひシくシもあシしシをあシちシうシくシはおシくシきシ事スをかシめるもみシうシありシ必シもよく辨シへシてそあるへきシそシの理スりシを例シをもシくシは

さんせん

うよはさんといふへきをかよもせんあむせんをうじせんと誤るもく
ひ多し又此うよえもてあもせんといふへきがうもせんおこせんをお
こせんちせんをおもせんとうやまるたまひも少くいられらもい
へてうば詞八衢^ハ佐行四段活といへると下二段活といへると又変格とてあ
けたるとのをちめとふよくゑとくえをさる誤みあすぬれぬを
しあゆじかく何にといへるにの立居とてこあるこせんもみち
せはいろ声を聞せそくせんよひもあれちよしうれりをひよ
コトへあけたるたゞもいもや佐行四段活と下二段活との辨へのま
をうりしゆゑとみやう北邊氏を世のういあてうるこよなくて

うれ八衢の原うもやとたくへつもうり功しき書うきし人あるにう如斯
ろを見ても誰もおとろきてよくくみくんとつしもへきを詞の活きの道
あるそ 通^トさほと云へきを通^トせりと誤るもく歎けり必しも通^トせしかるへきを
すも又通^トせれもとらむきり或と會^シまもおどれもかるへきを合せ^シおこき
候^トやうとしてひめ其必しも合せ^シまもとこそりへきとをも
あんきもおこきと誤る類も少くいれ意をつけて正へきよれりし

あてせて

論せさせとといふへきを論せさせといひある。せとあもあて任せ。
てを任あて又此うもじをあむしてといへきをなませてといひうの
うちじてをうつろをせてといへきをなませて任せ。うもじ皆謬也。又論^トさせとやうと誤れるも
行変格のせうて志と活きをすれとらむるといふ同一受るも必せある。きよーは共あくがう
りふへし又させてのせは下二段活也御覧せさせといひうもじ書^トおほうと考へ准へし
せれ

せさんせし。せんせ。せ勢と佐行の四段^ヨ活^ハる詞あり。こは友鏡考六段たゞ
せり。とり。詞の如くに^ヘて躰言^{用言コトモモキ}。用言コトモモキをうけてそれを又活^キ二言と
かひをうけ詞也。万葉よ國看志^セ。してつ・せんらしも舟出せぬ。もかと
いへる是也。これをも佐行变格活のす。ばのへきはうけ幸とのみ思もん
ま宜しきし其故をえす。も截断言^{コトモアレル}を此せし。のにも連躰言
をもうてつねの四段の活^キに貸す。足にかとのす。ともそう同一活
きと聞やれど也。あくあく。蓋せるの条^{見給ひを見しもひといふ。うおときかく。あるへく。かももる。}。今
ら別の意別の詞と云ふ。あくへくれもうのける。とつ活^キませひとた
ひうつてせんとはくらむ也。とくいふをきこく固ようせのへるものと
りまと轉りて活^キはぬが異^コせす。あと云とめちめと辨ふへしあはい

を四段の活言とものオ一音^{ヨリ}も一段の活語^トりも各その將然言^トりさとひ。
せと活^キと全く同^シ。四段のとくふむをかず。や。孰りをらぶ。かといい一段のとく
も佐行变格活の將然言せ^トり。あまにせと活^キととのふてさてそのせん
とり。詞して變る^カある活^キともの運用言をのみうくること上よい
へろ如く。躰言とて是を又活^キとひの事也。

益く らるく

とうくの用言より。何を。何らるく。と活^キ詞あり。此^トをふう^トも
あ。ともいり。又これを羅行下二段^ヨそれ。る。る。と活^キ定りあれ
とあるくも四段^ヨらり。るれと活^キもせし。や。万葉集十四卷^ヨひい、
ねろといたる。ものう。云とあるかと辨みれどさあももか又同卷^ヨぬ

すかぬ故ゆく。あともけり。それ。こちあむもんとくふ事ありといへう
うるもぢる例よやあくん。説よりてさてそみ言の活やうを考ふる也
そ母比も例の於を畧したれど思ひとくふらんといへる考。それあるへき参考
へきうえあらはすへて万葉集中の語の活きつきていくとく且と向き或いとあやし
けたれど少くらはこれ。一傳の議を物せし。比達をこれをたくべくのみ見えし
こよりて此卷をとよむこと多く多しとのみひじきしなきて後をく。考へつれもおな
くと字音のつゝひきぬの今とを異なるなどと活き
きぬをよく聞えども多きそのよしを別りふへし。抑のちうなれ。とやうに
活く言へ。ありとて。古詞とも。古をらりる。れとも活きし例も。隠
乃あきにあらわと今りふところをあく耳またつやうなるこよりて爰
と聊ういひむく也さてらる。をふるくたらやるといへり其らる。の
か。あるへきがるのうに誤る事初学の徒のつねありとくへと解
せらる。解せられぬと云へき處。解さる。解されぬ。いい合せ。る。

をあさそくとくふ皆とく。觀せらる。觀せられぬ。論せらる。論
せられぬとはりよへきと論さる。論されぬ。觀さる。觀されぬとはりよ
へきと考へても明じへく。瘦せらる。やせられぬ。見せらる。見
せられぬとはりよへきと見さる。見されぬ。やある。やされぬ。あと
もさう。よへきと。うるに准へてもはとうへき。ひよへをよに。よそ
こせられ。といへきを。あこされと誤り。任せられを。まうされ。きうせ
られを。きうせられ。といふ。あひの誤り。いとく。多し。皆此らくとく
ろ。いみやうつを混へて辨あう。はをあらぬうれ。まく。は。但しあく
あむ学者も。おこされ。まうされ。食えられ。あとひよ聞えさう事な
き。詞あれをさて。うらへしか。といふ。それと。しまうに。いと被兼をか

あれやせられをやされえられをあれへられをあれとひふ例被縫
りていみしきひうことありゆきもむうしれよき書被縫ともくはさくみ
さるあやまつとすりたぬをや伊勢御代哥被縫きくめ命被縫くわくと
トナヌれーう如きも今の人被縫を仕被縫されねももしへきやう被縫あすめれ被縫くも丈被縫
しむうーのうはそのうはーき哥集物語被縫あともさく被縫もくもくとくらぐ被縫文章被縫を俗被縫いた
る詞被縫づひユ物被縫さくとおはーき書被縫ともくは此詞の活きあぬ被縫もむうもくに正被縫きかんかな
おほき宝物集被縫が哥被縫おもひあせられ被縫ていとあそれ被縫もくろーうきとあるもくひせ今
の人被縫を合被縫されとりふも同し事
トやあくまん被縫を譲被縫りそし

にろさにろ附せざれるとりふも別被縫の詞被縫はあらわるさこと

まへの用言被縫づるにろと活くはこれえせす。す。す。す。す。す。
と用被縫しだりとみやくのよし
と謂八衛佐行の下被縫御言不御間の被縫みさぬのことをへる被縫かへて思ふ被縫し但被縫シカ業の
おもあはせす。す。と活被縫してさ。し。にせとそいもさうし詞被縫もたまうきつはあくひ駒をは
きてといへるあとをさ。ととはあーそもせことを爰被縫くつへる。れ。そ。と同
くうつくいひよくえたく用被縫あらうとあれもそうし次上被縫くへる。れ。そ。と同

一さぬさにろと活くたれもさせ。と。さにろと活くたれをあらくわさん。さし
すまうあるゆきめをたしう。さ。こ。せ。と。も。活。し。た。う。と。み。や。く。く。う。こ。う。ち。く。も
つきニえあだんうぬめそかの。うれ。らうくと同一さぬあういもゆる四段
活と奈行変格の活とがうくろとたコ一の音加佐多奈よりせ。にろと
活うし吹きをふす。あうせあうひろ。一段活と中二段活とを受るときを方二
の音きまち二ひ。よりさにろと活うし。一段の活きの射子をいさべるひさする
の音きまち二ひ。よりさにろと活うし。トリムへき處被縫ていするひするといひて大
うかうに組し着被縫る見する。トリム詞あるた佐行下二段の活語のまくすりあるとて別の事
あり紛あうる。かれさて中二段の六帖被縫宇治川のせようてふあーろ木被縫おほくれひを
もよひさうる哉とみえうる如くこそりへきすもーさうどころうて豆ね被縫くとひいたら
といえんあと太閤ゆるやうなれと聞えぬひうことある下二段の活と佐行変格の
ことうをあらへしにてよくつきまへきあとなり下二段の活と佐行変格の活
活とをうけても方四音えけせてれえ。めえれ五。よ。う。ゆ。に。例也堀川百首萩の枝被縫をあまれせざ
を受れも方五の音こよりはさううに例也にうとあるみくひをえす。あを

きさすとひくん
を叶もぬ也とあるへし。うちれも互々誤り物にる事多一のみとへて下二段の
活字で解せ。さほるとりふへきが解さうるといひあたせ。さするといふを
きばあもさだる枯きぬ。ほるをかうじるとりふをもぢやぬ。中二段の活
字。おひきるをおもじる。ううけじるをちうじる。とりふ類みかうろ
し。但し万葉十四卷云。あぬを波佐世。氏云。とあるふとは馳もはせ。を
いろと活く言なれはせ。させてとこそあるへき。はもぢ。ぬ。今論
をうと。うは誤り似たる。う。は。と。りふ。あうじ。こ。を。う。く。け。
馳もさ。し。せ。と。佐行四段活字用きたる。と。ゆる例。と。お。ゆき事。あ
れもおもひまうかる事。かうれ。次下の条。い。琴。ぢ。とき。う。せ。ひ。う。せ。さ。せ。
と。あ。ゆ。そ。と。りふ。へ。き。と。せ。は。さ。せ。と。同。く。さ。ま。あ。れ。と。誤。と
り。を。き。ト。け。き。り。ふ。ま。き。と。を。よ。く。辨。へ。く。へ。き。と。と。せ。抑。佐行下二段。」は。せ。

せんあと活く言な。もその言の意。てあうせ。もむろ。は。せ。さ。と。ひ
ひもし又同行四段。」は。」。も。そ。ん。あと。活く。言。な。も。あ。う。せ。し。む。る
も。は。さ。と。りふ。格。な。ご。とい。つ。れ。の。ご。と。も。み。れ。同。し。然。う。う。書
く。あ。せ。あ。い。ろ。と。りふ。詞。を。あ。う。せ。も。る。と。き。も。あ。き。と。りふ。へ
し。俗。言。い。へ。も。ひ。せ。さ。び。あ。う。と。見。え。う。も。い。と。意。え。が。」。今。い
く。う。う。あ。れ。」。も。か。る。と。き。こ。と。ば。あ。う。う。み。の。み。て。つ。ひ。ま。と
も。ん。人。の。爲。と。辨。へ。お。く。を。」。上。う。い。へ。る。如。く。あ。せ。あ。い。ろ。と。りふ。詞
あ。う。は。あ。う。せ。」。む。る。と。む。せ。ほ。う。と。りふ。こ。そ。正。し。く。は。あれ
も。」。あ。さ。ひ。と。い。ち。俗。也。と。こ。そ。い。ふ。へ。ぐ。れ。あ。う。ほ。め。古。事。記。た。る
阿。佐。受。袁。勢。佐。々。の。ぬ。く。ひ。ま。い。ふ。と。い。も。ん。こ。は。た。と。と。上。の。く。と

り小ちせさに。と。りへきう如くなれともはさせ。ともいへるを見まほ
馳をもとさ。し。に。せ。とも活をもあらんと。と。うたろと。あ。す。し
ゑくひうて後。下二段のみ。あせ。あい。と。活けろのみふろもあ。す。
くは四段。あ。さん。あ。し。あ。せ。とも活きしと。のそとた。みやく
れることもあきかたり。か。よ。う。く。よ。じ。る。と。さ。じ。る。と。は。こ。き。ぢ。る
ことあり然るをあきかれるといふか。を俗言ありといふやうに聞ゆ
れ。あ。さ。れ。を。ひ。き。く。に。う。も。と。き。り。る。も。け。ふ。き。う。は。を。し
ゆ。る。た。上。に。いろ。き。に。る。と。出。した。る。に。ろ。も。せ。に。ろ。に。れ。と。活
、あれと。れ。を。ふ。る。く。は。上。の。細。註。ニ。さ。し。す。せ。とも。活。う。も。し

きのと覺し。られ。れ。也。され。れ。あ。い。に。と。り。言。の。み。ひ。も。や。後
乃物。在。て。も。あ。さ。せ。え。と。あ。る。へ。き。あ。り。と。そ。の。あ。さ。の。き。も。あ。る。
に。せ。と。う。れ。佐。行。四。段。の。活。活。く。あ。る。事。あ。る。し。然。る。ふ。あ。い。も。あ。せ。
り。に。る。と。活。く。と。佐。行。下。二。段。活。と。い。ひ。な。う。や。う。で。そ。れ。を。た。令。の。時
も。あ。い。に。と。り。ふ。と。も。い。う。て。い。ふ。へ。き。せ。に。る。と。活。く。定。り。た。う。ん。せ。だ
い。とは。活。く。事。あ。し。見。せ。を。見。さ。瘦。せ。を。や。さ。と。や。う。
る。も。必。し。も。其。き。さ。と。さ。ん。あ。い。せ。と。活。き。て。せ。ん。に。る。す。れ。と。は。活
、う。ね。せ。さ。て。又。あ。や。え。の。例。は。馳。せ。て。を。引。も。あ。た。く。め。く。と。せ。け
さ。く。て。と。い。へ。ろ。う。て。し。う。は。こ。そ。例。と。も。ほ。げ。き。よ。く。お。も。ひ。辨
ふ。へ。し。次。ひ。う。せ。ふ。を。別。条。く。て。い。る。引。

又ひをさせ

仲正う女皇后宮は一めで奏りたりける。琴引きをせし。又ひをさせ。さもひをれどと見えたる。されど今れ人を琴引ひをせひて。ひをさせ。さもひをれどやうにそし。あらゆる世有名をせん。あらゆたちはうけるもの。のみるふも。うを辨ひたり。とあらゆるをあく見えによく。上のくびりといへることには。ふ味ひてその正しき。うめとがあきらむじへし。

又ふうせらる

宇治拾遺物語十卷。主上御笛をひそむ。けりやう。二調子。歌うて。ふうせふひをく。とある。ふきすふを例のうやみじて。ふう

せと。へろ。てこと。もあし。その次。明邊調子異。こあたへにあされ。大云。御え。ひて。ふうせ。られ。と。あらも。明邊。をして。あらあめふ。ひん。う。そい。そ。他を。へうせ。ひ。の詞。あ。り。や。る。と。う。を。え。今の人。とも。れ。も。ふ。う。され。と。り。ふ。え。ち。も。あ。や。み。う。せ。す。て。よ。此うち拾遺の目録。は。後。の。を。み。ま。此事。ば。い。ふ。や。う。て。も。誤。り。て。明邊。ふ。笛。ふ。う。と。せ。も。ふ。事。と。い。へ。り。こ。も。ふ。う。せ。さ。せ。給。ふ。事。と。あ。る。へ。き處。と。上。の。条。よ。い。へ。る。ひ。う。せ。さ。せ。と。同。例。あ。る。よ。う。く。い。ひ。て。も。ひ。う。さ。れ。と。よ。へ。き。と。あ。る。そ。う。し

又。へ。る。さ。へ。る。せ。さ。へ。る。

くそりての世は書ともうは吉房朝臣の吉野拾遺^{スケイシ}・しきせをも
あいしきせをひ御らんしさせかといへるいとおほくて皆いといふに
そや閑やるを今世もうれころの哥も文も何うもといと々^{タタカ}かけ
こうまへたるともうなともう、ろ誤りもむほさてやう^{タタカ}すあ
らひうきぬるアそくろえね中もうしのうき書ともの詞つうひ
を意^{スル}こめてまみへうしうへに^{スル}も上^{スル}いへるするとさ^ハは
との辨へ^{スル}こと^ハ意得をうはこれらの事とももひのつう^{スル}明
なるへしらて呉つ^{スル}て^{スル}正き^{スル}へおくをしうけハちまく^{スル}とす
きへたる如く妙用言の道のあをうの又なき書^{スル}あれとそ
中う^{スル}もいうよそや覓あう事のあはうちキ^{スル}れるこれられとす

ろ中^{スル}こと^ハえくみおくへき^{スル}上卷^{スル}佐行下二段の活詞とてあけ
くうつ^{スル}○せされかく此を二の詞と舉たるもじと^ハ立ゆり^{スル}難
しかくあ^ハは。いろ。そいろと^ニ出^スあ^ハへき处也。枕再子三月
辨柳のう^{スル}をせ^ス桃の花^{スル}あし^{スル}せ^ス櫻^{スル}あ^ハせ^スあ^ハと^スてあり^スせ^スふ
ひ^スきう^{スル}めみんと^スあ^ハひう^{スル}や^スあ^ハれう^スえ^ス公翁^{スル}まろ^スと見
せ^スせ^スも^スえ^ス又^スあ^ハき^{スル}せ^スせ^スも^スあ^ハと^スな^スいと多^スせ^ス中^{スル}せ^スせ^スみ^ス
させ^スとあるえ^ス。さ^ハると出^スへき^{スル}の例証^{スル}也^スう^スあ^ハし^スよ^スせ^スこ^スう^スあ^ハる
え^ス。ひ^スると出^スへき^{スル}のた^スと考^スてみ^スへし^スく^スひと^スき^スた^スせ^スそ^スいろ
乃^ハ文章^{スル}妙^{スル}も^スめ^スと^スう^スれ^スてみ^スえ^スを^スや^スあ^ス物^{スル}た^スと^スせ^スそ^スいろ
とのみ出^スてもうれ四段の活き言の^{スル}。さ^ハま^スら^スを^スう^スけて活け
ろす^スとい^スか^スの^スも^スく^スへ^ス。但^シハ^ス衛^ス上卷^{スル}佐行下二段の活詞^{スル}を^スね^スな
あ^ハあ^スい^スひ^スあ^スか^ス妙^{スル}文^{スル}次^ス。せ^スそ^スいろとい^スを^スも^スの^ス詞^{スル}如^スく^スい^スひ^ス
と^ス別^ス二^ス条^スを^スた^ス詳^スり^スる^ス。せ^スそ^スいろとい^スを^スも^スの^ス詞^{スル}如^スく^スい^スひ^ス
も^スれ羅^ス行^ス下二段^ス。そ^スら^スと^ス活^スく^ス語^スを^スう^スむ^スと^スれ^スら^スそ^ス

とてあらんあ如し紛らむ／たゞあくにや物語ふみなみに其人をうやまひてせぬにとへるもはへたりせ。ちかくも佐行の変格の活きれ爲とし詞又も佐行下二段活語の才四音のせにてさてそれよりゆゑると活うせるよアモをりれ後撰集秋部ヨシミチセアル枕冊子ヨリらはへのきうそくせさじへきう堀川百首ヨシ萩のえ波をれさきするこれらも皆夏格の活語のせをさじるこ受たるなう又合せおれるあくひもみあ下ニ段の用言のせをさじたるなり別ヒとつた詞とはあくひ但しこを固くよく知つてあるあはへられと然うは傳されの頼えせうそえうそあとをもあく別豆也有うづひ

又 四種乃活うにるさじるとすつ定り

いとくくちくらゆき事とりふ人もうるへられと初学の徒の爲上の件りにいへることを猶たまにあとは上ニにろと举たるを四段の活詞の其方一音よりきとろくをあくろくにるくろくをくろく。

するたつをくくにるのくみふをのたぬにるくむをくまするあとりふられ也ハちまと上卷佐行下二段の活の處右々あなたるえといへるもくられやうふ覺くさも又上ニあらるく当せよ一段の活語中二段の用言の其方ニの音よりきるばきさにる見るをみさにる又あくろくあきうにるくふるをこひさにるあと活うし下二段の活語の其方四音よりくくるをうけさにるいふをいてさにるとうむるをとうあひうにるかくいふられ也くくて詞八衢下卷羅行下二段の用言ともがつねたる下ニにるらうくと活く言のくくいふをうとあらせ考ふへしさてうれえと扇くやせもやあとへるえぬせ。佐行変格活のすりし詞の活きあるをうるくとし詞もすふとりの詞をうけてもせらるくとし定りあくひてハちまごみえ

たる変格の活き言の中、佐行の変格と加行のとれ共に、
行の来るも、からく。こさへる。とやう。活く也。又奈行の変格の活言をう
くよ。す。れ。と。い。あ。に。る。あ。か。す。る。と。り。例。あ。る。を。羅。行。よ。う。して
も。い。あ。る。と。れ。と。り。例。あ。る。た。と。い。れ。も。と。く。う。れ。へ。り。あ。く。至。り。て。
と。そ。は。条。こ。う。とい。ふ。詞。の。条。合。せ。考。か。へ。し。

又 然さへる。と。り。と。正。し。り。ぬ。詞。う。と。お。も。は。そ。事。

上の件、いへる定りが、古へのよき文とむ。照してよくあくまでも、八ち
まこと、詞の自他力と、きあること、城りよくて、あくまでも、物をあうひる詞他
とあうひる詞といへること、あり。此、かたつたこと、もつひのうち、あうひ
るといへるが、こそよろしう。あらへし。あうさん。あうし。あうじ。あう
そ混じることあれ。

又 ね ね

上の件、いへる如く四段の活言のオ一音り、またはまら。よ。せ。じ。る。と。活く
語いとおほし。それをいとあるき處。うても。さ。あ。に。せ。と。活。う。せ。う。と。も。覺
く。き。ト。ー。本。ハ。ち。や。と。上。卷。佐。行。の。用。き。言。と。も。れ。説。の。と。う。に。四。ナ。テ。ウ。又
平。六。ナ。オ。ご。う
くい。る。も。け。く。ゆ。る。事。と。も。あ。う。も。あ。れ。と。こ。う。意。う。へ。き。事。あ。る

えまふりふ詞回字スあらうるも舞字スらたうも皆同し波行四段乃用
きみてさうにうむたら幸あきうこれを佐行の活ス轉スて回之 舞
之の意あるをうほは令回を四段の活き令舞を下二段の活きと云ふれたり
やるが初学の徒かとももくは八衢ス佐行四段活語ともを出せら處よ
のみまもんとあるがみて令舞もあもたまはさんまはしかとのみ
活く語と意うるをうけあやまちもやらん考るが令舞を佐行下二段
と活く言あらう枕冉子スけぬたんめしてすそせんかと仰ち
そく 猶それまはせ。けせむへと集りて申まといへうはあくあるを知
るをし 又の枕冉子の詞つひをもて上の件くといへるさじるといふ詞のつひひまゐをよ
く辨スはせさせとりふへき例あることを明めてこれをもすなさせおといひ
あやまらぬやうと 意うくへき事そしさて四段活スてまはにといふも引回ひかくとふそぎれ

ある思ひまうかる事あうきゆて又清む済む住むみを同一 麻行四段活
語スて其活きさみもとこ異かるこくなス然るにアれをもあうもむる
をりふる令清令済を佐行四段スてすみさんすまスーかと活りスてすま
せんにすまスーとやうまいもとス又令住を同行下二段スにせんすみに
とやうのみ活きてすみさんすまスーあとを用うさるせいスのよだ
書スもの詞つひもみれこそうれすく辨スしゆて其詞スと改
意をつけて見れを古書スもよあるをうち先代明かるいと多くて其例15
くもにとくに但スしあはいさうはいとも枕冉子ス父母のうくれうせて侍る
をたつねて都スすぬにる事故あるさせたぬへと申されるとひらかと
又 せざんといへもきれてつうめ事

土佐日記又四日うせふけも云いさくけ又あせさきに物もなふきむし
きやうなれとまくらこちにとあると上コラマサハものとてる人
々コアヤカモえあくてとあると人々と文字はある本空うるへくね
てぬと丁うづくゆく味ひ見てても黙然ともえあくて聊かるコアセキ
といへろうそ此處句せさて物もなし。されど次ついてゐりこれをたむ
とつきよひくとけふとせさくに物もなしと説て此せきのにす。次も
きれもつきむじる詞と思ふ事あうれてくくなくを必しもせきむる物もあ
る。文一のあらへきれるそいてぬ日記の文をもすくせきの物もあ
しとあうしたるを。文字の脱するとはあじきともおもてられ
又よく考ふきとさてもあらあもえぢてといふこと聞えねたいま
處の解大うたようしきぬのみをおほき

せきせ物もなし。あるも聞えがくいゆきふきせきせんとある
ふされ事のいろをうきくへくるをそれもきとえがくされとも。ことをあはいゆ
けふあせきにときうつてあるとくみれ此日記の註釈等の此
處の解大うたようしきぬのみをおほき

かよもじ。あそけんあとの活つきて意うへき事とも
うよけんといふ詞の活きとも詞ハ衢。其まことえうるう如くた。佐行の四
段のみ用く語ありけれと宇津保物語藏開卷。ひろき野々とき
うよもせ。ももん。あてふことうらぶん。蜻蛉日記。殿の通。せあひし
源章相云。云と。うり又あそけんといふ詞もやちまく。佐行四段用言。もの
つゝよけふとふさやうあれと紫式部日記。殿まのあらせ。ふへり
と。うるたくねみてこ下二段。も活くよやとふと思ふ。事なり又

あそちへとりふ詞も四段活かる。枕典子、御覽へあそちせ。玉へる云
 とあるぬくひ諸書、むほし然るにあれらもたうよ。ひとりふへきばう
 やまひ詞、うよもせ。といひあひ。あそひ、とりふへきばもうやまひてあを
 せ。あそちせ。といへるのみよてばれもうち此事を八ちまこと上卷四十にて
 こそくこうりてある事也。但し他、怒せさにう詞とあれもうもく下二段、
 あま少しあうね事。ひり別論へし。いろを初学のほとふとほはがるぬくひをも皆かく
 よう佐行四段と下二段とあそかたよ活くあうとも意得らんそれよりわ
 る。おはせ。あそはせ。うよはせんともさんもあま。あそはあ。
 うよはさんといさんも皆ひうてくわくいつくつてもいつうても筆に
 あむんましく何れみありとも物にへしあし。せしの辨なくともむ

やくの事あることをあれとてあるへしとやうみたりといひなきらうひ人も
 やあらんそくみあみくそくそ必それくまくはさう事なうれ
 まへまへる

たうき人のうへが申又もゆくてもその向ふかをうやまひてとのりふ
 こ行ふふをゆきまくといたあふを取りまくあといへるも例の佐行四
 段の活き言つてすあはぢ加佐多波麻羅の六行とも例の連用言算二
 音より然いへり缺まくも四段の佐之須世、活けり今までと標したるもこれあり又六行ともコ音一音はまら。よ
 つけてませまへると活く語りやうませ。せうませ。それも此活きりぬ
 も恒の佐行下二段ませ。まへると活くよてめつゝしきことむなうれと受
 る活きれ音通例と異のまくほへて下二段の活言と四段の活語と連く小

夫四段の活きのオニ音より ゆきくまうす。 つるふとりふ如く つけける定りたる。此まれると
ソのみもそれとみをり 今まにろと標し なれたりく 惨然言より連
處をも考へてその詞をあくるふたへねといとうかく出さむ万葉二卷
ふをし 川志くみ セ ヒガニモ。 塞益を流す水ものとよらぬし 同十
二 あひ 川志くみ セ ヒガニモ。 五卷大舟 妹の 安良麻勢婆 もくみもち やうき との 拂あは めし と皆將然言をうけたり はてませばのは未然
けろ後杵集戀三 おぞり やとく人のや。 ナシ 寢覺 レ 露を
をいへる婆あれもませのせ下二段の活きある事、とあるしたいし
うれたえてさくのなうせあ やゑとあうせをためさまし

かとのも婆も同く未然以へるがれとられられせ。佐行変格の爲ヤ
ていもやろせうキセ あリ せもあリ せもあリ のせ。文字の佐行下二段活ある
とは別あり これまちくま。まくもあ イてついにていもん ト せを
まリ せの約ナリ といへる一説あれとそれを誤り也にへてせナシ と
り。せうれ佐行変格のハ り語の用きフ といつれの語ト そも
恒ハ 連用言ト うりやうりやうりセ もみるめもひセ もひと皆あくリ 然ニ
まリ 用言ハ つてわれは まくを截断 あリ まリ を連用言ト そもまリ
せともいひてかへりて聞えらるたうつリ ふリ まセ もはまリ
くセ もの約ナリ とそへまれさるもあじさるはまくもまくも同
言の活きフ そ此くを省きていふことを何ナシ 何ナシ 何ナシ

とへる如く其例もあれたり

つれ^フ下二段^フ活^ク詞^{トモ}のふろく^フ四段^フも活^キし
物^ト覺^シきり^フ又それ^{トモ}ある事^フ
萬葉三^ユ見^モ左可^受伎^{ヤス}濃^シ古都良波^可馬^可毛^アと^リる^モえ^スかく
活^クへき詞^のさぬ^トも見えられ^テ云^々けすはけめといふへき例也
とハ衢^{セキ}上の^フは見え^テるを今思ふ^{トモ}あはいあへ佐久^モ波久^モ彼久^モ
も四段^フと下二段^フとあく^カた^マ活^クて同一^{トモ}意の詞^アうしなる^ヘし
あらえにて加佐多波麻羅の六行^フ涉^リておほよそ中むきしよりは
た下二段活^クと聞^キる詞^{トモ}なる小古くも四段^フも活^クりと云^フ有^キ
詞^{トモ}其例少く^ヒま^フ加行^フでは右の^ナく^モあ^セ 此類有^キ
有^ヘき^ウ

佐行^フは馳^スす寄^ニかと 馳^スた上^フいり寄^ニた神代紀歌^フめろ豫^ア嗣^ア余豫^ア嗣^アより來ね
の故^ハ アと^フね^フる^ハる^ト詞^{トモ}よ^シん^ト。すだ^トよ^シと用^くならん^トされ^テそ彼^ト重く
あらゆ^セコ^トもまみ^ムし聞^セめ^ル又言^依じよ^ギ。かと^ハるも^ニみ^ハー哉^ハた^ラと聞^セも^じる也
多行^フは隔^ツと云^フ詞^{トモ}あ^ハへた^だんへた^だつ^トき^うのみ活^クと覺^シく^{トモ}万葉五^ヨ九^スる^モ
波行^フはた^タ木^ハ枝^ハふ^アと 此^ニも中卷^フ別^モひへした^モか^ナて用^吉と^モあ^リつ^くる
の事^セうる^タ中昔^ハう^カと大^トこ^レつ^ルて見^ニえ聞^ニタ^タの意
から^ハ見^シむ^カ聞^シへきとやう^ハひ他^フつ^トを見^シふ^キた^ましきとやう^ハと^きこ^う
く分^カき^トる^ハ加^クな^れと^ト古^くも^{その}これ^フく^も四段^のけ^くく^きこ^トも^いひ^トあ^リ
麻行^フは令^ム止^ムかと 令^ムも^ト是^モ中卷^フ云^ヘし止^ムを四段^フ活^クせ^すた^モ万葉五^ヨ
羅行^フは恐^る忘^るかと 九^時の盛^りを等^タ美^ア。 た^と美^アを連用^言ア^レせれ^モ
其^例を出^セるを見^ヘし其^外も万葉七^ハ泊^シ瀬川^フ流水沫^ア之^ア絶^者
許^モ曾^モ吾^モ念^心遂^ニと思^けぬ^トある流水沫^アあ^ラみ^アと^ト外^フも^トみ^カれ^モ瀬^ア
も^トるく^モ四段^フは^ト言^ナう^トし^アろ^ヘし^ハ下二段活^クあ^ハる^モ水沫^アと^モソリ^ヘれ^モ
此^類お^ハで知^るへし又^レれ^トと^モう^トそ^トそ^ト今^のそ^トはた^モ四段^フ活^ク
く^{トモ}こそ^ト思^トそ^トふ^ると^トは下二段^フ活^クと見^セる^モう^ト

古事記夜見
國體ニ宇士多加禮斗呂呂岐豆とある如したくしに、
事ヨリケテ意得おくへきも上の件ヨイヘる詞ともを志う四段ユ活ウセ

ヨリヨリ古言それ下二段ヨリのち、ヨリテけたゞちよどりと
行れうち小わうちをさむまきたりは、中昔より四段
もけくくあくふはなき語とも也とあもんも宜しく
其故もう比書紀ノミコトハ邏珥とある古事記ノハコトハ禮士
とあるノテマリあらへく其のやう寄に、隔つるあといれも下二
段の用のヤコトツヘる例いとふるきとアラコ皆これあくしもあ
に一連きの文ヲ活さみちニあく用ひて意を全く同しう聞セ
ろが出さ也 弘仁式十六儺祭の
条文ノ 桜惡伎疫鬼能所々村々爾藏里隱

布留千里之外四方之堺云急余罷往止追給止詔尔狹薦心氏留里加久良
半波大儺云云あれ以見ヘし初モニ藏里すふは加久良波ノ以をうは
四段の活きにて以へるたゞその前ノ隱カク。
布留カク。といへばも下二段の活
きよつゝへるたゞくろふるもかくろの延もくせくろの延り
あくはうくろふをとふ文字ヨリをの辞ヘモアツモヘシ例も即
万葉十九ノニ上爾隱經カク。月の惜れと妹う袂をりそく此比とある
准へて知へしをも連駄言を受辞すりきてく一連きからての證とも
えまくして少くしに又中昔の書ともヨモリ古めう志キウヌあるもか
きコアドレ、中卷おもとの参考合に、シクコトノイヘモ古言
きコアドレ、シクコトノイヘモ後の詞と偏りても論し定むまきたり

四段と下二段と又中二段との三種ユ活く語もある事

八ちまくよくとソ詞の四段又中二段のよき活く証もび舉て示せる事とも皆從々し然る。此詞も猶考れ下二段も活きて、と加行も三種の活く言と云へき。やそ々先今世の俗言も川よけといふことのああより思ふ。防鴨河防葛野河などの防守字も、ひょくろと用く言ふあらんと思え。に津國の有馬郡も、うえよけと云村名ありとて和訓葉もよけとソ詞を舉す。考ふれ。但し、もけらとあたるも俗そ舉ぬ。防河の防も今代川よけといぬ。よく當りめへくそれを川よきへぞれ防河の防も今代川よけといぬ。よく當りめへくそれを川よきと大云。きようは村名川防と書めろし。極のうへてあらんと思ふ。かく也。但し、よきもうれサクも訓む。避字もとく當りて彼方へ依らし。いふ詞よけは又フセクセクとも訳せる。防も當りて。此方へ依せしと。にちうて固より異也。云へきよきも聞かれとある。かくひとつの用きさぬ。うへて意も異なれ。故あたら字もあらぬやう。はあわざからへし。其あちひも此三の用き詞の物を見たる。どうを考へて

いくる

いんのきいくいけと活く言ひて、ハチャと其後陀うひて此詞を同じ行ひ。中二段の活けて、いんいのり、いれと活くと覚えし。ふくといひ中二段の活語とものつゝも出でて、蜻蛉日記云と。うつ付て、ひのれをやく思へりしやう。これもとと四段と下二段との二がとに活きて、意異ある。かくへしその故たまう四段の活く例もすてよ。ハちまた見えたる如く、かて万葉集も生ける。ゑやうりもいひやうて、いんのちもあはと。うく多く見え古今集序もいきといふ。のちもあはと。あはて明也さて下二段も活かることおもよも。い。え。い。か。かといへる。うも考ふ。ほりは蜻蛉日記ある。い。も。い。

の活き方あるへしきて四段^ノ活^クともかのつう然るりと下二段に活
うせろもより活^クあうじる^トて自然の詞使然の詞と云うれて聞^カ浮ふう
浮く^ルみつみ^トのみあくへりし^トと考^フる^トうけろ^ト日記かるをそ
この文すへての意を考^フる^トかは自然の詞とこそ閑^カれうめいけ^トへ
いけ^トかとの如く使然の詞也とぞ思^フれぬ也ゆれもいくらといへる
まいな^トと活^クが^トはう^トてこもかはいき^トと活^クある
へしきれを此詞も四段と中二段と下二段の三種^ノ活^クなるんとぞ思ふ
うくて又下二段^ノ活^ク尋^カ小神代紀^{ニのル五}施恩活^サと無赦活^サをイ
ケタ^ヘと訓^メうるを宇津保藤原君卷^ノひたうけわ^ト鳥^カれ^トを
い^ケて源氏螢^イけみこうしみいあ^トめちを^スる宇治拾遺猪を^イ
い^ケて源氏螢^イけみこうしみいあ^トめちを^スる宇治拾遺猪を^イ

あり^トおろしけるばみて狹衣ニ下^キい^ケてみんあ^トな^トあれ^トと
下二段^ノ活^ク言^アるこ^トは^ト明^カせ^テハちや^ト^上の^ノ源氏手習^アる
い^ケは^ト見^マは^トあるを^シこ^トた^トい^ケの^トま^レる^トい^ダ
と用^ラう^トは^トし^トき^ト定^ムく^ト宜^シか^トしか^ハうれ^ト下
二段^ノ用^カり語^トみんそ^トう^トへき^ト中二段^ノ用^カれる^トすか^トち^ト
の八衢^ノ引^カる蜻蛉日記^{一ノミ}あ^トんと思^ヘとい^トる人^トい^トつき^ト
あるこれあり^トこ^トみれ^ト下二段^ノ活^クも^トも^ト下二段^ノ
活^クる^ト上^ノ引^カる^トは^ト藤原君卷^アる源氏螢卷^アる手習^アる宇
治拾遺^アる狭衣^アるい^ケし使然の詞^イい^ケ取^フす^トい^ケコ^ト射^ムへ^ト其^ノ
る^ト此蜻蛉日記^アる^ト自然の詞^アる事前後の文^ト明^カく^トよ^トえ^ト右

の藤原君巻あるれとも其意異なれを活きぬも同一事知るし
文章くもろてのあらむ宝物集ニ方三ノ戒をまえめくいきへるまくきうと云ふに
てよしらくとけぬいくるすありといひやれもと見えたるいくともおのづくいき出る事
をへる下ニ段の活語とはあらめ事明うをるうへユ次上ヨイキスル
まくきういへるにてこゑるに中ニ段のまたまきかる事、よく知へし

八衢^ハ加行四般活の處^ハくとあひて古事記と万葉と並引てられと其
証書とひよ四般活とよつとを證するゆゑ^ハあるもひつもたゞさる^ハ
もつてある人の定めつゝくあれも中ニ段の活とおほしきあら其故を
万葉四卷^ハ敷細乃枕從久^ハ久流涙ニ曾浮宿乎思家流恋乃繁爾とあ就
きありといへりしをけふとおもひへてとけりきふうれとも今考る^ハ
此久^ハ久流を別の事^ハとくきんと活く^ハはぢました^ハ羅行四般^ハ活く

流。文字あるへしう^ハ古事記ある久岐。あとは猶加行四般の活きあるへし
その証を万葉八卷^ハこのまゝちハ^ハ十一霍公鳥^ハ見え同十七卷^セあや
みとひ久^ハ人鶯乃^云と見え^ハと^ハと連駄言^ハく^ハとあは^ハ
て明也^ハちよ^ハと^ハ加行四般^ハ出^ハきるも^ハよ^ハく^ハと^ハしも^ハれ^ハもの引^ハ計^ハの中ニ段
もあらぬ^ハのけ^ハく^ハき^ハ四般^ハのく^ハり^ハと^ハあま^ハく^ハま^ハれ^ハねとのみ出したる
もあらぬ^ハ

またも^ハき^ハこ^ハえ

いつし^ハくとまく^ハくと^ハス^ハはあにあけて天の河原を^ハくわ渡らん
と古今もいへ^ハ見え^ハま^ハく^ハま^ハく^ハをの^ハていへる也^ハとりあめ^ハを猶
おも^ハく^ハく^ハく^ハ跨^ハく^ハと^ハ待^ハと^ハを^ハく^ハか^ハるあらへく其跨^ハく^ハもまた
まんま^ハま^ハく^ハ活^ハりしつ^ハ事俗言^ハもあら又我や^ハのえの木^ハつき

木月毎つうひもやらん意まく。かといへる哥をも考るよたあつみ
るときけこれもまつむりいそく、ろそくいふ説けよろしきらへ
き放さてその詞の活きもといもんつまつ加行四段のあるへく思る
也でよくまくけんまくけ『あと跨字の意の詞を加行下二段の活さ
ぬつりもつねの事あるをつらく思すそれをもとよそく四段
用けるもそれ轉したるあらんさて下二段のもとよそくえ
てこえつまつてけいあきるたるへしきらく死消えのけとあれるぬ
くひとそ思もろ抑これをもとよそくえあるへしても何つりてひ
ふそとなまも景行紀九十跨地猶行とあるがモヲロチヲタコエテナホ
イテスとよめれをもあひあることならんとがはしよかひそめ

てさて此詞のとみをも跨の字のやうをも又うれ鞠こえてをすりけてと
いひ距字とあらうてけとりふ言のうるあと何それト考へらせて、あん
きくけとも股踰のつまれるあらんとほりあるうくてそのまくけ。加
行下二段 行下二段の活く言を又傳く多き。もんとやう。四段の
活く言も活くせる語のあらうよ
りてこそきく心をとやう。文字が連躰言とせるとあらもひる
あうじれ申さくとよふ類そそげて四段の活きもをいつれの行まても其音一音トトト
ひて連躰言あるも躰といひあせるもあくべること少くともまくとよる。あし
ゆる例と見やこれもううえあくへまるすれかとうあれをつけてよひかくよかんあれ
つきてあもへもうちもみ史記の世家ある速也の字をてタケルマとよし
矣。あともも此活語を用ひくふのとそ知らる。晋世家と與女期三月
至而女一日至何速也女
其念之。けとろくううう四段の活詞の格例あることにてこつまくけし
とづく

跨くも物とのけ或と迂り道へきを然せぬるすすあそち急くあれど跨く意え
急くてあるへしこと又あゆう朝まき年下まきあくひまきに鳴て
せかをそつるとよめるぬひのまきもとは公用言アヌアシメウとか
つも思えれもするあくされとこちあは清濁も同ノクルネモ別あう形狀言
コトマズ附ぐまじまくさと活きてうれちくノト活く言似て末字あとづらくるノヤウモ見えうし

さうやく

今アソあれこれもむうしも男山さうゆく時りあくらゝすの坂
これも坂行サカナガをひたるつてその詞も榮字隆字タカニある
るなるへしあれを榮行の二字タカニ當ろとあすふもよろしかりし
其故もこちもくさうや。さうえあと也行下二段ミダラ活く語の又の活きよ
てその活きれ文字の其行の音タカニうすそれより加行の活きとあ
きるつてあうつれる例若もこくやをこくや。ほゆをさやくあくいふ

ぬまひと覚へきをそのちやくとりふ詞のあうなるや文字の同
音豎タカニ通ひて又さうやくともいわるなるへされたりも見え坂
行をがみたるくとこそたやくも行字の意タカニてもあるへされと打
まうせたる詞もとより榮行二字タカニ當ろのみタカニあくじ但し
くゆくをさうやくといひ見る物タカニ見覚えたうれと加行四段の活語
事也とあるかくを考ふへし動くをうそく。ひおほくる例ひおほくる例タカニをうそく。ひおほく
なることをあくへしてさあくとりふ坂行タカニたと見しきえ拾玉タカニ位山タカニまた
みの峯タカニも林タカニまれにさあくへくもあきみと思へれとあるあとから又さえ、ひ
くね也とあわえさう新葉集タカニさあくそり続古今タカニさあくみ
よもとあるあとあれどまた隆字榮字タカニあくのうなるのみあるへし

あへを あへ あえの別

活くもくらうやくも也行あもろれ又の活きあらん^コ例せきあへく
云詞あともあやくも^トあやくとあそ云へき^コとくもあへくと見え
たるもい^クと云^コ然らに其をへくも也行下二段^コ用けるあやれ又の
用き^コはうどくも波行の下二段^コあへふると活く言れ又の用き^コ
うし其波行の詞大字鏡^コ繰手^{ミツテ}を手奈戸^{ハシタ}と註せるつて
知ろべし^ト同書^コ又驥^コ足奈戸^{ハシタ}久馬と註し和名鈔^{ミナフ}八丁^{ハチヂ}塞^{ミツカニ}を計^スし
て阿之奈^{アシナ}也那^ナ困^{クモリ}久^{クモリ}と示せりを何^モぞみれもいもあへくと波
行の下二段^コの活け又^ト加行四段^コ活く^コそあ^トけ^ト組^トし^ト榮^トや
や^トく^トれ^ト如^トく^ト也行下二段^コあえ^トあやると活く語の轉り^ト他^トの行^ト^吉
て四段^コ活き其^コことの意^ト古^トれ^トあへ^トい^トく^ト大^ト異^トあ^トじや^トう^ト思^トる^ト

詞もあき^コそ非^トにそは^ト加行の四段^コもあ^トうね^ト佐行^コあ^トや^トと云
詞のあるとはやく也行下二段^コ活く言れ又の活き^トて自ら然ると^トあ
と然^トれるとあひ^トうる^ト詞^{アヒト}くる^トも^トや^トき^トや^トき^ト
とあえとい^トれの行^トりのな^トん^トも^トみ^トう^ト竹取物語^ト天人^トう^トや^トひ^ト
よ^トう^トあ^トお^トせて^ト弓矢^トを^トい^トて^トま^トも^トら^トえ^トう^トろ^トに^ト
に^トえ^ト大空^ト人雲^トの^トて^トた^トち^トわ^トく^トア^トれば^トみて^トう^トづ^トの
人の心^トも^ト物^トお^トそ^トも^トう^トあ^トひ^トう^トも^トん意^トあ^トう^トり^トく^ト
ら^トして^ト思^トひ^トあ^トう^ト弓矢^トを^トう^トた^トて^トん^トと^トす^トれ^トも^ト手^ト力^トも^トく
あ^トう^トて^トあ^トか^トぐ^トた^ト中^ト云^トえ^ト見^トえ^トる^トな^トく^トま^ト万葉^ト二^トの十九
セ^ト十九^ト之^ト奈^ト要^トう^トあれ^トあ^トい^トへ^トろ^トと^ト同^トし^トき^トあ^トも^トそ^トれ^トか^トえ

ウリタリ 抄とあ る一本 とうぱうよろーくとも思もろれと又字鑄乃手奈

戸せる証ともなとよす考ふれもか。ウリタリたる中コトある本のぐことよけ

んもうともあむられぬ。し 古くよりのまぐうちの素本をさやうとある也さて

證の字コあふれるがくと波行下二段コあへ。をあす

と活く語ふるくおもまれてあえコもあくあらす也 然ゞうきと此竹取あるたええ
まう也行の下二段の活きのひごとさくの置へし 万葉ニの九ニ丁トと念之萎而とら
と見えこれも手コ力ハあくといへるトとトかほシべのトとトりふへられと正溫抄ト八の
と和名抄ミのナセある轉筋加良須奈倍利のことをトめいへるやう手かとのふトもひれたるやうを
きかすトとトかへりをいひこえたる欽瘞の假名トあえをわかれも鳥萎カラスモ
え有ヘつトとトいひ又次四十と和名抄ミの裏定ト訓阿之奈閑アシカニ此間元那因久トありて行不正
也と示せるを定めて足瘞タマアレをアレとトよろはエよらをトなへくよりトあい史記エシ左
傳タラ云足疾万葉ミ足痛タマをあふるをタマとトあきトいへるトとト尚按するト萎と字書を
見れト人の萎人不忘起トといひ不能行トとトへる字トなるをトとト木くらはタマは萎人ミ
とト痺タマとトあくトこれらの字コあふれる熟ト也行下二段の活トあるトくトが万葉の之
奈葉タマとト書きタマとト記せるトて曉タマとトさて又トそれを物トつきトへるト落瘞タマとトおのろ星タマたる
あやのタマとトあくトのタマを源氏昂木ミあえトるきめ若葉ミ御衣タマとトあえてトとト猪

あらうれト皆トあトいろへトあトもトすあトくト此トあトるをトとトあうへトうトいへる
証トあトふト不ト着トかトしトいト色トとト見え字鏡ミクニ鐵ミツをトとト奈ミ也ミ頃ミとト註ミせミるミ同ミしミ証ミとト覺ミ
うれトそトくト考ミるミ竹取ミのミえミとトあはト也ミ行ミ
コトあトるミと活ミくミ証ミとト先ミえミさミめミあトへトとトあトよミ也ミ 又トあトくミのミまミの活ミきミとトうれトとト
異トと波行下二段ミとトあトへト あトるミと活ミくミあるミ事ミ上ミ出ミせミるミ字鏡ミクニ和名抄ミとトて
明ミ也ミ つトてミかトかトかトとトなミあトやミとトの言ミの意ミをミ詰ミこミとトかトへト あトふミるミ字ミもミし
辨ミふミきミるミ古ミ幸ミ記ミ垂ミ仁ミ段ミ波ミ盲ミといひ頭ミ宗ミ段ミ膝ミ筋ミをミ断ミふミあトはミ外ミ台ミ跋ミ也ミとトあトるミ或ミ大ミ万葉ミ二ミ足ミ痛ミとトうけミるミ又ト史ミ記ミ老ミ傳ミあるミ足ミ疾ミをミアトナミテミ訓ミるミかミとト考ミむミことミとトくミ事ミの
あトえミあトえミとト同ミうミぬミあトれミ盛ミ衰ミ死ミとトあトもミめミうち道ミあれミをミあトへト其ミ日ミとトあトるミ山ミの宿ミつきミえミいミるミあトもミ足ミ疾ミ足ミ痛ミのミまミよミくミあトひ行ミ不ミ正ミのミ註ミとトすミあトくミくミ當ミりミさミきミをミ思ミへトし
コトあトへトもミ文ミのミ活ミフミをミあトはミとト知ミへト正温抄ミとトみ意ミをミや

へキ

宇津保物語國ミつトれミは卷ミあトとトのミにミそミあトび引ミへトきて源氏明石ミ御
うトの少ミへトれミしミ枕ミ典子ミあト明ミのミ月ミのミとトあトきミいミしミう

をうし銀考とあしへきたるやうなる。まことにあそをみれも加行四段活^フへ
タリ。りふ詞あるあり白氏文集^フ折青苗^トうる折を。ハイテと訓せるもへ
きての音便あるへぐれも折字^フ當る詞と聞えたり。但し折を多義多音の字也
此詞俗^ムも加行下二段^モも活くまもユ^クすなはそれもかの^フくも然る詞と國え
詞と曰ふれて。それも物^フも見えたり。やいまと考へに。もてせへくとひふ詞も雅^コに
神本物^セも今も十四五年前あるをそれ^コ其事いひおきうを然^フおもひうばにその州本の
うしほ處々^トとあつまる^トある故^フやじてとえす今こつ立^ハ此一条をくほ
まくありひへてうれ神本もなさるたうひのまうおほしみん人それをもる
うたふれ組しふく^フ至り^ルの条^フちうする事何^フあるを考^スべ

せめく

老ぬとてあとう和^ハみとせめきりんとあるをときてせめきと責來也
といへる説ありこそもと某の卿の御説^トひきげと從ひゆくし字鏡^フ恨

恨の註^フ世女久とあるこれ^フてあをもたて四段^フ活く語也。枕^{ヨウ}はもくびの
責來也今もめきりんとよむるもそれとも異あるへしこうて^ト已然言を劉^リとうな人とせんじに免
川^カ婆^ハせめきりんとよむるもそれとも異あるへしこうて^ト已然言を劉^リとうな人とせんじに免
ケドモくもじめろも其の正しきようあへりつひて^トりふもの闇を恨也。恨者忿呼之名と註する故
うれ字鏡^フちうする^トて世女久と責來とは同し^トもことをあるへしきて又せめきりんとよむ
さんありといへる説もくもく恨を恨せと註せる。來字^フうくる詞のきくこと活く
とは其活用のけぬいづくぬうへり

ける 来字の意の詞

來字^フ當りてくといへる詞古くの世 なまの活字もやうニありわざと思
える一^フはこきうる。れと活くあく八衢^ト加行变格^トてのせんふつて
古今おしよろうて諸書^フ數多くにある事也さて二^トは加行四段^フ活く其証^フ万
葉十七玉つまみうひの家礼婆又日本紀二歸化^トあるをてウケリとよむ

かとこもうれへちすと上^ナいもやる四段活のオ四音をさしよらぐ。れ
と活うせる例あり万葉^コク^リス。麻豆^{マト}かとくの音を連駄言とせる
も四段の活詞あれど也されも使の^タれをといへるも花のさ^ルれも時の
西^ハれもかとりやく全く同し活きさぬありさて三^ミは加行下二段^ミ活く
そも万^サア^ミみ^トく^レぬちのいそき^ト父母^{ツモ}の^モに價^シ爾豆^マいまそ
悔き^クく^けの音を^コの辞^シしてうけるとて知へし^シやろもすくて下二段の
し家の字あれとそいつくても皆けとよからんもよろしう^トめ事うそ家字を
もきとよむへき趣きもとすべてさるぬくひの事ともおけやくゆー体のいそ
まいひてしへこ祖もく浪^ハねは保豆^{ホド}ふとも同しもくひて今
えやうくおもひえよ幸もよのう傍^ハきをも別^ハ詳^シせんと
蓋^カせろ

万葉集四卷^セ舌背子之蓋世流衣之云云此オニ台キセルココモノ^ト

あろば^クヒルと改めてもよむりうそのよ^レはつさよひもん^キ律^ム
世流^セ友鏡^{ウジギ}第十段^ミ見え^クる活^キ語^アく^レて蓋^カとよめる^ミ
きてあくめ^カめ此^カ蓋^カと加行一段^ミの活^キの著^サ服^ハありそれを^シ言^ハの如く
いひあ^レてさ^レせろとうけて活^キせる^トそ^レう^カ 四段の用^シきあくま^イ
ひ中ニ段のあ^レともう^カせ^レる^トり^ムみ^ハひ^ミにて^ハこの世流^セを佐行^サの四段^ミ活^キ
運用^シ言^ハを^シしてそれを^セる^トう^カる事通^シ例^ハ也^ト
て世須^セしも^トふ^レゆ^カも^トやま^シ詞^ハの方^トも^トある^アく^レ其^トを^シき^レて^ミせ
る^ト又世留^セも歌^ハと^トう^カへ^カ處^トも^トい^ヘと^トお^カくも^トあ^くそ^トい
か^レる^ト万葉^ミ三^ミかる^ト皇^カ者^シト^トませ^ト天^カ雲^カの^トうち^ト上^ト廬^カ鳥^カ流^カ鴨^カと^トり^トく^ト
安母^ミ里^ミ麻^ミ之^ミ云^ミえ^ト見^ミえ^トる^トあ^トえ^ト勢^ト須^ト活^キ言^ハと^トい^ヘる^トと^ト同一^ト意^トの^ト詞^トあれ^ト佐^ト
行^トと^トも^トの四^ミ段^ミ活^キ羅^ト行^トと^ト四^ミ段^ミの^ト用^シき^トキ^ト二^ミ音^ミ里^ミを^シき^ト語^トする^ト活^キし^トり^トて^ト
氏^トり^ト辭^トも^トう^カす^ト古^ト事^ト記^ト傳^ト九^ミ丁^ミ本^ミ文^ミよ^ミ那^ト賀^ト祁^ト勢^ト流^ト汝^ト之^ミ著^ト
よ^ミわ^ミう^ミそ^ミう^ミ人^ミ

景行天皇の段

有ナリ 延佳本ノ勢字を藝云とナケル也古言をナシテ改めたるナリしらのひうも也
ノれを藝シテロトモミケギル
とあらゆることもやもあらへき 祁勢流とは著而有を云古言ノテヨリモルトソト
同意也 キナリを即きてラ
るの切りたるアリ そはまゝ著而有を古言ノ祁流ノリ万葉十五ニ
和我多妣波比尤思久安良思許能安我家。流伊毛我、許吕母能阿可都久見
礼婆又この御答哥あるも熟田縁起ノ日和可祁流。アリ
參赴キテをケリと訓み万葉コノリと云辞ニ來
事をナケルアリ是アリ是モ着有と同シ掛ケリ
さて其祁流を立有を多々勢流行有
を由加勢流此類いシカト云さぬノ祁勢流ノリ云アリ 又 同卷
ト云
云ニ和何祁流意須比乃宇閉尔阿佐都紀乃其止久都紀多知尔祁流
本ノテは此紀の延佳本ノ依て祁藝流と藝字を補ヘリアリのさう一ムアリ着有を祁流
もレバ事上ノイエラク如し殊ノ此モ己のアレモ祁勢流ノリモ祁流ノヘラサマウリ
又 月十 丁未云熱田大神縁起云日本武尊云那何祁西流意須比乃宇閉尔阿佐都

紀乃其止久都紀多知尔祁理又十一云美祁斯モ御衣也云万葉十四アキミ
ウ美家志云きこる伏古言ノ祁流ノヘリ云又六十四云服モ祁勢流ノ訓
ヒヘシ 伎多流トヨミンハ 四十一 ひくことノモ非ハ 又の亦六 いもく所服モ祁勢流ノ訓ヘー中巻傳建
命段の哥ニ和賀祁勢流意須比能須蘇爾ノアリ観考フヘシ いへる
もタミいられゝる事モアリナシ今少しうつぬとアリアリテよく
聞えスコシ抑著服ノイフコトモの加行一段の活あることをたれもよく
ある所あるをけるとけといへるも意もあかし著服の字ヨリカクアラ
ラ詞の活きやぬも又むとつ別ノあるヲモナクル其別ある用キシヌ
トリキモ一音ツツセ加行の四段ノ加幾久計ノウの來字ノ當る詞の活キ
くありナクアリさるカク其方四音計をモウケルモリナク又ラリるれ

と受る事ひうすをあるひも亦さもすせくらむことひうぢて
そく代す。足すかくもはら同一例の位行四段の活きあれもその方
四音勢ウの伊幣勢許 曾あとの如く復らマるれと受ることひうるあひう安家流
といひ那何祁西流 とぞも御衣を 美祁斯といへ ふこも是よりよく解けう されも万葉四卷かる立させみう 盖
世流ころものれ益モケ とよもこくばいもれする事也されとあはキ
とよまんせにあももコひうことひうへくめこと上着服をも恒 人皆のまれる
加行一段きくるといへる 詞としてみるやうといへるう如くあれせんも着服の字アシテ 意
同一き語あつゝそ活きアシテ 加行一段と二あくともへき也益世
ヤセルとよむときと著アシテ 袋言アシテ したるもみちせり キモノ類例あくまくケヤル
とよむときと著アシテ もあく用言アシテ あるあくとてついてきアシテ きこへアシテ 見
給ひあくアシテ にちこれアシテ 似て同アシテ にとく被アシテ し

給たり 紿たり

たぬき。何とつけあるも給アシテ せるたまアシテ うもいふるき
にうけ文くんアシテ こそ物アシテ へりれ中アシテ むうしのあくアシテ あくアシテ 袋言アシテ へ連
くときた給アシテ しる何アシテ いへくあるも給アシテ せらアシテ 給アシテ あくのみよ
へし世のういかくアシテ 文アシテ みれアシテ すへても源氏伊勢あと学アシテ へりとおほへき
筆つきアシテ 中アシテ 給アシテ せらアシテ 給アシテ 何アシテ やううける多きアシテ みくらへだ
しきありアシテ これアシテ 准アシテ へしてをまるへしをアシテ あせらアシテ いひへるを曰アシテ せらアシテ かくじて
え少しアシテ やくへうアシテ とかくアシテ 文アシテ あくアシテ うとうアシテ いふかそや國アシテ もあく
おこせるといふとろしううちうアシテ 事

おこせんアシテ おこしろアシテ おこせたアシテ おこせられアシテ とりへきアシテ あこ
にアシテ おこせらアシテ おこされアシテ あやまアシテ とひるこアシテ おほうちアシテ おとアシテ もう

のやうにしてハチまくに其例証をも出してれんころと示せる事あれと
おはあまうる人のあやまう意くまくさと今けむもろしおくせ
こそ五百とせえうむうしの物もまれづく誤りしるやく見
われと猶少きを今け世をあへて大うる誤りむるやくいふをむや
くの事といひおも入さへいと多し思すむちの俗言よこじいづか
といひ俗文と指越御越あとうくゆるえどもちこせの魂をもあらへき
今そ其俗諺とよりて雅語をらやく誤りあくもくろきたよやく事
とはあれること

あそん

合にろと佐行下二段活語あることハチまくもくさきあくめらう此詞

えと四段の活う下二段のうひと紛ちくめくつれを活用抄もことあ
りゆきよくゆきくめ残してあるがうれハチはくまで至りてよくはきた
めえくらみてそれとくりよへき事もほとくなれと此合にると
りふ詞の下二段の活ある事はのみさくめて佐行四段とあそんあはし
と用く語もまく別ひとある事はふさゆくしてもあくめくわくとての
のハちやくとみて幼学の徒あくとあやうくじくむきくちもひなり
きう事もやらんと思ふくまうてこくよそを辨へあうんとく令合
字あくと當る詞もくへばくもくと下二段と活けるあん古の正しき例
とて近比の人の文章とよもされもあそんあそんとほうひあ
そん何といひつ、けあくせるとみあ誤りあら事もくと八ちやくとみ

て辨ふへきありあらうに此外ニ令遇令會かとれ文字ニ當れろ。活き
佐行四段のたることもある事あり万葉九卷ア吾恋妹相佐受玉浦
丹衣片敷一鷦將寐スサの相佐受スサあそんあそん。あらへ。あそせと活
きて合せん合す。と用くとは異なる事明か。いや、あれも佐行四
段アあそせ。あと。あと活く語も又一あらへるそくいふ事意得
あくへき事あくし風雅冬部人々哥をめしてあそせ。られけろ。庭殘菊といふ
活き古事たまう事もあらし也今は人たまえあたされ。どうとやういもめとさア
あやまれる。あらそくして神代紀私紀アとてつちれう一書ア遂將文合を註アて豆比
余美安渡志世卒土須アとあらそくして合ひるといふ詞の活き四段アあらてむうしの例アたうへ
りうの私紀アとくも後人の贋作あること。これアてもあらへくくる。つけても詞の用きといふ
事ア字ア考あるひとの道あること。いよ思ひえつべき也右引る風雅集の如くこそ
りふべき例ア書アこと。源氏鼎木アと覺ア合せられりと見えそうある

ウヨモク うよはせ

ウヨモクとし詞の事アみもいひへとこく又えみあくへきやああ
り先これもハチヤア後撰集金葉伝吉物語あと引てうよはせ
よもくれといふこと。あきを今の人アすれも誤ること多くとあ
る如く下二段ア活く語あり。うよもくいふことみてはなたち
上アいへろおこじろとこれとくもみくしつてもこじる。佐行下二段ア
うよはせ。佐行四段アの。のみ活きて同行四段ア活
用きて同行下二段ア活うさるあり。あらも、つれもいへの定りあることあり
あうれもうちれおこじろを四段ア活ア必たえていふへくため例アと少
しうちうてこれをすてよいへる知くあそば。あそはしをあそ
せ。あそば。あそば。とやまひのうそといひへきと同例アと上
て引し藏開卷アうよはせ。給さんと見えうる如きこと。あり然れど

もこれとよく似て、意をうながすのよもんを必ずしも佐
たくよひ。波行四段の活字いふへきがのへるのみあつて、うよひをのへえ
くよは。あらへきよからんや、初学の徒とおもへやれ、古書を
よくみぬうれこひあつし。その故にハ衢上卷四半の説を見
てあるへし。抑うよひをのへて、よせといへることも古き書とも
もあれ。それとありぬてよくころえあくへうつゆ同し語
の同じ行と四段と下二段と活きて、自他のどうは、あいの例とはもく
ら同しきとれ。教ひ詞とするのみに事なり

いまれ

万葉十二もちれ日出月のくねうく君平座イセ。而あくをう思

ちんとあくと同十五四ひとくか、君を伊麻勢ミサセ豆いつまで
うねうあひをうん時のあくなくアカシナクとあらつゝうて、うめうか
ろへしげてこの万葉たか君抜いませて、とくへうも君をい
まほ志むる。とおきえ他を然せざるたれも他のみつ
ら然あくふ抜いまして、とりふとば異あり。されど歎詞も下
二段二活くも使然の詞四段四いまうんいき。あと活くも
他の事あくと自然の詞と分れて聞やけるもそんにあた生在り。或
も他へ行きふとをいましといへること。万葉あとくおほし
おきも其つふとて、その意をさみくわれと詞は
一つあく散ふへき人の自ら然あくふ抜いへていましといふも

皆四段の活のくなく即万葉五一さきく伊麻志豆ちやうへ
りさせ十五五新羅へ伊麻須伎美う目をこれらは行ひふ
いへるなりまく古事記神代やちほあひえ云ぬしあそも遠邇
伊麻世婆ミチミロエ^女除タツつまもくせらめあくもよ賣タツ邇斯阿
禮婆ミチミロエ^女除タツあがきてつまはあしタツあられうを阿禮婆と吾有る
トはいへるよむくへて他の在すをいへる也ろく意を異なれ
と詞も一ととくうちれも四段の活きたるをうけ君を伊麻
勢ミツ至シテひとくへといへる行うしめ申あうたうく
れうのをもくしめ申うてこれも意を異なれと詞も一
てくろ下二段の活のくばせ也孝德紀タカハシ六請四衆於四天王

寺迎佛像四軀使坐于塔内清寧紀タケニ便起柴宮權奉安置カリニニツルニセこれらは
引て古事記傳十七ノ四九五ノ正五
伊麻世ミチミロエ使坐ミツテの切りとのへるけかさやう
て伊麻世ミチミロエヤセ同シテこくならをもひとよろあるし然るよ四
段活ミツテ下二段活のハマセをひとつヒツかしてともこれ
ちくまんをへるつうこそ後にはなれハ衢カキは其ひと
よなれる後の例とすがらへうきと出ハシメて妙詞四段ヨリ乃み活く
と思うちしよ下二段の活も用ふる詞と見えたりとあるそれ
もうへたる事とて即其例と引る伊勢 宇津保源氏枕冉子を
とみやクニ引る中コ伊勢のくろをきうおもんとりふきトアリとあるこ
とみやクニ真名本コハ御坐津流ミツルとくき大なるの本コハくるゑミツルくろ

おもへるといふと、あつさても伊麻須流の証シテ。あらぬあらうの引シテる如くならずは異本シテるからん。されど此詞シテて古シテは四段シテ活きてとて他の然シテる事シテること下二段シテ活きてとて他を然シテせし申ことくわうれのちた物語書シテたとて其らちめはからう如くシテありあられシテ尚もシテむくシテよなれるのミシテモシテ。とほくシテと思もるシテあうつともシテおとふシテ物語書シテたとてそのつひシテぬシテ寛狭シテあるう其故シテを其下二段シテ活くシテは他の自らのまにをも他シテしていまシテあむらばシテも通シテしていへシテ寛きが四段シテ活シテるかシテはうけシテはちまシテようつほの俊蔭源氏浮舟シテあると舉たる如くシテて數シテもうシテたシテれを其例少シテきが四段シテ活け

るも古事記シテ首め夥シテてあらうシテ勝シテへられあらうかシテうえこれも多シテき故寛シテしシテも云へく下二段シテ活シテせる例シテを少シテれ狭シテしシテりへきシテ似シテ

たとへシテ佐行変格の活シテとけふりへきシテを例めシテ

おもせんと將然言シテいひ連用シテは志截断シテよし連軀シテよし。已然シテすれと活シテせる詞中昔シテよシテけうシテ書シテとも多シテあ
之シテをと古書シテものシテあはまシテの切シテれシテるシテめればシテあはまシテ四段シテの活シテて大坐御座シテかとの字シテ當シテることシテは續紀四シテテ此乃天豆日嗣之位者大命爾坐シテ而治可賜又シテハアシテ朕波御身都可良之シテ於保麻之麻須爾依天シテと書シテる又續後紀十九シテ長シテは大ホニレースシテオホニレセシテ必シテよシテむへきシテ御坐シテトシテ又祝詞シテ万世爾御坐シテ令在給登シテまく御座シテ坐志未シテかとうけるシテをちうシテぬへきシテなシテうくて此御坐シテの二字シテ伊勢物語シテ眞名本シテはシテおもへシテ當シテうされシテおもへシテおもしシテたるあシテいとシテはシテし

おもせ。おもせと活くへき小右^{ヨイ}へる如くせます。す。す。す。
 と活きおほへるをうもくせ。ともいもてせよといへるかと惣
 て四段活と同う^{ヨリ}但し仰ひるよせとのいへるも少。又三段^ヨ活
 は下二段中二段の活言とも異なうさるかく^ヨあれを変格の活
 と名くろんふいられする事也。而てその変格の活^ヨハちまく
 圓のとよへき例証ともち中昔の書ともよきうあしといふも
 クう夥しけれとあくまは紛れし^テ四段の活とよへくやもス大下
二段の活きとよへくをきま見えたるけれどこれうれとあくやゑそのすちよくこうえ置
 いため其変格と名くる活さみの例坂一二へ出しちアその
 紛ちきとよへくめをもせんとくまう將然言せ。文字あるこ

とは竹取物語^ヨきく^ヨおを所^ヨいうてうえく^ヨおもせん^ヨとく^ヨ云
 みておもせわとふせれ^ヨ源氏總角^{古ノ止三}さもおもせたん
 と思ひ同花宴^十御^一あいめんついてよきこえ給しきとおもせわ
 も口をし^テ同處女^四よかとて^テはさやうとおもせましも^一又
 +故れとく^ヨおもせま^ヨはとせえいて^一枕冊子^{春五ノ三}思ふ事お
 ちせ自^ノと覺ゆる^{又ニ}左右のたとてちばおき奉りてくまもせ。
 め上達部^ヨかしきく願ふ意のあんね將字の意けんまし不^レぬ
 文自^ノかとて受るをあへて將然言なる例也次^ヨ連用言志。な
 ると竹取^ヨおのうやくにあはしまく^ヨつるあり處女^{古十ニ}さるへき
 フ^ヨす。す。す。れと^ヨタつ^ヨおもしきるなる^{ヘシ}桐つを卷

ユをさきとりふ取ユ エアモト。つきたるこちいはううは
有アム竹川タケシマ 耳々アツアツもあくうておもじあいヒコロ 次ユ截断言カツダンゴンのす。
文字なる事モノに明あれとあはイモ桐キつタケ おもじアムシ 所ス
たス尋スル 你タレ もんと處女ツレバ タチ あもじアモシ へきヘキ こそ 枕カタマリ カタマリ との、席シテ え
をうしシ おもじアムシ しシ あアモ らんラム へきヘキ しかどシカド すへて截カツる、
詞シメを受スル 例シテ タク へきヘキ あとは有居アリなシテ の詞シメを受スル 時メドは連射言レンセイゴンをうやて例シテ
て截断言カツダンゴンを受スル なう此ハシ ちめチメ そとシテ そのみシテ あうとあう活ハシ へり
和語訛略圖ワゴンガクルツ そよくあらへし 次ユ 連射言レンセイゴンを右シテ にシテ する 文字シテ そシテ た
るス これかんうれ四段シテ 用スル 大座オホシタス 坐シタス のおもじアムシ と異シテ ある
あとス あれかんうれ四段シテ 用スル 大座オホシタス 坐シタス のおもじアムシ と異シテ ある
又ス おもじアムシ るうくやひめ 桐壺キハシ 及シテ 席子シタス のおもじアムシ してお

おもじアムシ 御ミツ うちミツ そろもへ云ウム えりエリ 人も世シテ おもじアムシ ものあう
りト 云ム あト 也コ の辭シメ も考スル へし 枕カタマリ 春ハナ 其人のさふらサフル あト い
ひ出スル まカ しもシモ うけひウケヒ あト そ おもじアムシ 又タチ 誰タレ おもじアムシ
ると問スル てタク うくそウクソ かカ のむム ひとせヒトセ みミ か連射言レンセイゴン なる さて又已然言タマニシゴン
おもじアムシ れ也タマニシ 已然言タマニシゴン 婆ハシマ 棒ハシマ の辭シメ してうくるう諸活言ハグリ 又
おその結ハシマ ひとだる通例タマニシゴン あり處女卷ツレバシタス をとくトク あもじアムシ 棒ハシマ あく物
の上手アキラカ あト まカ あるをも举スル ふフ へりハシマ 四段活シテ 例シテ あるば此ハシマ おも
字シテ 希求アシキ の詞シメ かし下二段活シテ 例シテ あるば此ハシマ おも
ひト とリ 詞シメ 其ヒト とリ 二段活シテ 例シテ あるば此ハシマ おも
せシテ よシテ 又タマニシ 古藏カツジヤ 二十ニシテ いきシテ おもせシテ よシテ の玉タマ へシテ 又タマニシ おもシテ うシテ

もあちせ。』と見え、まるれどあれも少く、而てあらう下二段活ト
いふへきうといへり連用言のま文字なるは、上よりいろ如く『御前』
下二段活あらむせ文字あと皆此詞ちよ文字をうをこそ受てあるへり四段の活のさぬなり、而れとその連用言をうく
ろて尔をももの中、あの二をも受る事も四段の活も同
しうしうしおも友鏡も略圖もあらむせろ如くけともき
も活く語なり、その一言の活きあらうけきの二もま文字を受て
あち。きあち。けんあといひしあの二もせ文字ばうけて
せし。せし。うとみいひてあち。あち。あうとやうはい、
ぬ格りと、あれもけふ変格也。來字は當る。こきぐの活言もじへて此ニト
うもれ、とそはまれつけき。じもいひてこしとよひとむきよきとまれるもろめをこのあえ
せし。きあち。『もうちつもりかとはいまれぬをあわへし』竹取の竹の中

うみつけ聞えうし、うとあた林のれ月あらうあちせ。』を處
女卷古四十三 おちせ。』かゝ年比、そひなれとてのみ思出らるく
幸まされば枕春四ノ うき事いひて、やあつくわくうるへしと
て夜中までなんおちせ。』又ナノ何の官は其殿のいみし、うあちせ
し。『又セノ 藤大納言うかの院の別當、あ其志たぬへる
事あめ。』これ、ひめみよひ夥き祇思出るは任せていざくう出し
れくのえぢう抑その夥き例も中昔の書くむ人とごく知りて
あらへきを聊かといひあらうもそのあれ、もる事をううまく
うるさくいへるもいひうそりふく妙詞もうくと其活さぬの定り
て見え、うなる尔又うられ、れと紛ちうきもられをそれうう

て此うちちきこの活字をさへひき定格をあきことそし思
ひてつひきみうるしくつまねかへてたけことふ
もとへて詞の用きといふことを何ともおもへらぬやう
もあらんうとて也されに次第あねもくもを出でて復まくま
きもいさん
とあるあり

又まきみき

余氏處女卷一湖月鈔本より抄の四十三丁と大宮の御世代のこ
り少けあらばおもむけありなん後も主と見えようあれともう
一本おもせとあるそんでの例よう例ひてよきといへる
ハ陀免八衛上の
四面精きあと也文の辞してさ文字はうれえ

四段の活字たるがそれもあやうかれこそ即そ處女卷の
その前二十
四アモ意トおもせん又四おもせキ又三おもせシ方
かと四段活字トぬ証おほく見や外の卷々又外の諸のふ文ども
といふ明たる事あつまうはあれと乍四段のつやかと復ハ
やしまるとも右處女卷の一つには限らずとも思はるう今その
事をりふへし先づ處女卷の如き大和物語トも志もつけられふ
云おもせトとられとあれもせと書ろ本もあれとさと例の誤
と覺へきを尚ほのみもいもれしうと又思へきは宇津保藏用
今板上六十二み彈正宮トこれもあもせとのみりめれと同樓卷今下

初 殿おもてて云々まゝ御とくもどううおもひらんうしかふうけ
 今もさおもせ。うし云々_{うくせ}文字を希求言と
 りのあいし繪込もておもせ。又おもせと引せむれ<sub>此書もか
 り</sub> 蜻蛉日記下の小一条の大將云々おもせとて枕典子_{春四}
 やとくおもせ。あとみづけていへと又うちこくまをくまとりよ
 めのうそおもせ。又大鏡序云そくわせるえ云おもせう人_い
 あれらも方ニ音す。をその結_くし又連体_としオ四音せ
 なもを又宇津保藏用_{今板國譲下} みか四段の活語乃例
 またに有_し放_たうちておもせ。給_ひしよしゆえあは_は栄花浦_ヒ
 別卷云そくもくしておもせ。これとあれらも下二段活のさぬ也

変格りても四段活_もも給_ひしよひ_ひと
 いひつも必も。文字_かへき例_がれも也。うく紛_もきかく何_かの書と
 も_もほめられと大_きとを写誤なるへし其故_を宇津保祭使_ハア
 ウ_ル君_{きみ}た_まあ_くおもせさせ給_ひへ殿の_おんりつきいれに子
 の世_う生_う子_こ代_うしろやくおもしす。せんとがんゆあると
 聞えふ「うらうとくみれも藏用かるもさせの二字の脱たるふ
 もうもん_{其例をいたくおもくま}とりふた四段活_もきを樓巻_{ちよあま}ま
 引る余候_{まことに見えてるも下二段の活のうゑあれとられも即右コ}
 人_と思_もるくとおな_く一例からん抑_ひ伝行四段活_{言とも}を_も一音_{さう}せ_せりる
 り下二段并_と変格の活_{あらん}を_も四音_{さう}せ_せりる_うる其定格_{うる}も上_う別条たゞいひつること_也 宇津保えにへて字誤
 多_うれもよき本_えてたくさぬほ_き事_じ也但しれもとりか詞の
 すべて_も伝行変格活ある事を此物_{もの}の卷々_に其証_{しよ}举_る勝

へに夥しきかくそれよりみれを右ヨイヘる如くおもせ。給もおもせ。
させ給あるへくゆておもせ。されとまうるをおもし。これとの写
誤かるへく又重きといふものこそあまくもおもむるところし
るの脱たるたはへし。皆く意てみる。もくはひきとせ。文字假
希求言とせるもろくに書もよじていとおほきるをそれとく
く写誤ともりすへくにられとされのみをあはいふゝし。思ひ
あし拔つらく考きもこれその変格といもと活語なるか
らうてそもそもおもせ。とひよせ。文字を將然言ならばそれをもやう
て又希求ともじる。そ有る其例を加行変格の活きたるとい
ふ詞のその將然言。あるうやうて又希求ともあれる。同し彼

来るト此御坐るトは両行互々きくとあいとの活也まれ同きえ
ゆとよくして將然言を方韻なる音と(工)韻なるもの多くり。多く
ううそれ受る辞のあるやうにとよく似く先勿れの意にてうけ
か何そとりへることすべての活コロスで連用言のコテラうそい
ふ例也四段の活なれり。ひかるやきそふきれち。そとやう
いひ下二段のとて人か咎め。声をばせ。そとやうよりふそれ
ト准かれを來る。とく。かきそとくへきをやもいはてか。こそ
と云。即宇津保俊薩今本四十二。もこれ季の子あらも水り。例ある汝女佐
天駒のいるこそろくめ。も。そと又薦用あともさみを但しあも。そと。又
希く落葉。ううり。されとそと字ひやまつある。そと。と。尚祖の道ある。又論めた。又

過去のあくろとすへて連用言が受る定りたる來るといふ詞をも
受るは其通例と異りて將然言を受く但しあれをきしとやうともいづれと先定りて、まく
ようこしこしろといへる詞つうひいと多きが狀あるものもおも
去しとは、もてたなせし。おもせし。といへるかとば考ふるし
將然言をやうて又希求ともにるこども味おもせと互に例めし
ほへしかねいもく来るもおもむるも妙方よりあると行うも彼方
よりあちあるあもいよから其趣きへうみ似よれらなり但しむら
は上ますて今上あ藏用ある今上あもせよ也あと即そめ。よひそへ
ためまく如く止あ坐め。あと即そめ。よひそへ
たるものあるをいふといふこれもよそれもうけ來るといふ
ようおほえくる事にて來るを希求まくよしとのみゆふう
いとあらくよられ定りあれと落窪物語かとに折くよしといへ

るもりて今おもせもよ文字そへじていへる例もそへていへる例も
行る也ついてよいもん四段活言ともも才四音のまゝそく希求とだる通さて妙化
例あれとそれもまれとはよ文字をそへていへるもあることそ
行変格もともと行為るといふ言の一種の用きれるがおもむるよまごく
それと同し活行て言ひをいへ大坐を躰いへをも爲るとい
ふ詞ことして活行せるからんとも思ひく詞なる。その爲るばもた
せとのみいひて希求よせる例よかきよ違へるも又いふといふ
よく同し活きの語よ希求よよきの妙詞よの詞こと
尔てひとめうきもやうて変格と名のつく用きられると
知るへしハちま上本右カ加行ト伐行トの変格のすへよく似よる一をいへ
引ひしおぞぞるぞよ文字そへすとへ、おもせとのみいひもじるたゞといひ同卷
十五左カ来るとりフ討メ下シとこのもいへる例かうといへるこうとうこうたし

よ文字そへてごよといふもとえてあきはうひの
とやうことどうかほはまくへ審うたらんうしかみうくよおもくとも上
の条といへる如く將然連用截断連射已然いつ、^ヨ別きて外四段下二の
詞の活きとは一種異なるとのそ^{シル}今の世の人は四段の活の封つうひと混してお
いひ又下二段のよまきらむしておもせを^ルおもせつ^ルおもせつ^ルおもせつ^ル皆誤なりさやう^テ
むうしのよき文もつうひうしなどよりて文章や下れ世のものうちへ
すの心をや入て尚うたまくひ其時こそそりつこへもおもせめいちくよおも
せ^ルおもせ^ルえきやう^テおもせ^ルおもせ^ルおもせ^ルおもせ^ルおもせ^ルおもせ^ルおもせ^ル
エ^ヌと如斯四段^スも下二段おとこもつうぬ一種の活なる例を
おもおもく見えたるをやげ引出^スを發心集一巻ある文あり

おもせ^ルに附おもせ^ルおも^シま^シふ いま^シふ

おもせ^ルに^シるといふ詞との^シをくく見也 源氏帚木^{シテ}末摘花^サ楳柱^タ前川^ヤ寄生^セ更科日記^群

五五 おも^シおも^シおも^シせ^シさ^シるおも^シみ^シに^シるうれ約まれる小又音便^シ。 文字のそれるなるへし^{セキ}。 そもそも^シき^シても約られも^シかたるこれを^シた^シおも^シさ^シの^シま^シるのみを^シおも^シへ^シに其故^シ

も同じ散詞おも^シせ^シとおも^シは^シとおも^シき^シ俗文^{シテ}成^シりふと^シ遊^シふ
との如^シ、おもきうろきめ^{シテ}めあるう^{シテ}上の条といへる如く^{シテ}おも^シせ^シ文
字^{シテ}おも^シさせ^{シテ}さ^シると^シつる例^{シテ}おも^シせ^シた^シと^シさ^シ文字^{シテ}おも^シせ^シと^シ連く例^{シテ}此
さ^シるといへるこ^{シテ}あとみれも同しやうなれく^{シテ}おも^シせ^シに^シるは^シさ^シるの^シ下の^シる^シ
つき^{シテ}おも^シま^シるの^シまた上の^シおも^シみ^シつ^シるかと^シの^シじうちもあることそ然^シる^シ
その^シるさ^シるとい^シれの用^シ言^シの^シもすへて將然言^シうけて下二段^{シテ}イ活
く言^シされ^シあ^シおも^シさ^シる^シ 但し音便^{シテ}のそれを^シあと^シア 韻の文
も下二段^{シテ}の活^シ言^シと^シまる也

字とも^シ其例^{シテ}おはり^シや^シりふ^シあ^シう^シれ^シあ^シき^シの切^シす^シた^シ
夫と^シなれ^シるそ^シあ^シう^シれ^シそ^シう^シて^シあ^シう^シは^シみ^シう^シ傳^シといふ詞
わ^シろ^シう^シか^シう^シく^シく^シき^シま^シていへる故^{シテ}おも^シるといふ詞
の活^シき^シぬ^シのこと上の二条^{シテ}あ^シき^シに辨^{シテ}つ^シるを^シ此^{シテ}おも^シさ^シれ^シ
とり^シく^シ詞^{シテ}お^シう^シあ^シみ^シて^シぬ^シもんと同一^シ音便^{シテ}そ^シ思^シひ
そ^シのんう^シけそ^シひ^シて^シえ^シす^シす^シれ^シと活^シく^シる 友鏡の方四十九段これ^{シテ}日^シんする見^シんする行^シあ

する。中昔の書も多し。は將然連用かく希求りよりもあきてにへての用き言れ。將然言ひのみ受る格りたるを今おもさんと活ける。〔おもさん〕といふ詞をもおもし。おもい。おもせ。と四段の活くとも云へきやうと思ひて定り。あきそと誤りつひて。詞の活といふことは院免とばあへてうるめひうこうろうるともとやうんと思へば也。得ん。〔あもん〕とはおもさふに。〔おもさふ〕はふの。〔おも〕は同こと。〔おも〕は必思へく。次に下二段活也。とり。證も源氏寄生卷。きよけ。おもさう。御子。〔竹川〕。恥らひておもちう。いふ。いとをうしけあ。あと見えて躰言へ連く。と。うする。と。うされ。四段の活。〔うち事まつり〕。あれたり。〔寄生のもの子供と直〕。方二十。じつう。死ぬ。〔あもさふ〕と云。〔おもさふ〕も連躰言たる例なり。さて更科日記。〔五十〕。三月日。しもく。

れきありぬめりぬしてちてうと。里れたさうせ。よやといふをいと物恐。うきく。その山越。と。云。〔云〕。あきえ。四音せ。〔よ〕。文字がそへて希求詞とせらも四段の。〔も〕あひて下二段の活語たる例也。よく。口き。まへしきて又竹川。〔六〕を。あく。かくし。時。妙花を。口。そく。と。あ。そ。ひ。給。し。を。とある。と一本。〔おも〕。す。〔時〕と。ある。よられ。ある。も。あ。聞。ゆき。と。あ。通。本。〔て〕。これ解。う。あ。おも。しま。ひ。〔時〕と。わろへ。まを。そ。ひ。文字の音優。〔よ〕。と。あれ。た。房。へ。しつ。て。よ。引。う。く。み序。の。さ。も。さ。ぶ。の。然。ら。おれ。も。過去。の。し。へ。連。く。へ。う。と。又。お。音。便。轉。用。准。へ。ち。う。と。し。した。過去。れ。し。な。じ。と。時。と。の。躰言へ。連。く。へ。う。と。あ。う。也。し。れ。

をもあち／＼まきうびる。あちしやまちうせよやのせ。文字す。文字の活乞るし也とも思ふへくにあれ。文字若れち／＼す。う／＼はの活けるあ／＼も妙詞と下ニ段の活はあ／＼へれもあたすると同く変格活といふへきふれとち／＼はあ／＼は事右の如く時といひ連けたるて此／＼もき／＼活く友／＼みの用辞なるあやあるしゆてその過去の志みて受ろたすて連用言こうきれ定りなれ。右竹川のあ／＼しまさ／＼し時のやむをよこあまきる音とりよ理りいと明けし。むをうとよじあへを思ひ給へ。また思ひ給へといと多しきて又れもしまち。ひもあち／＼ましの延えりたるこそさるも宇津保国讓今十八ノ四十一丁官ふおち／＼まく時より官こち

垣の如おもしやうひて夜ろそ御めくらにあち／＼まきうみれは又藏聞下今四十六きみくち數をつくつてあち／＼まちふいづれとあくあくうけへ赫くやう／＼云。あとなむ例少くいはいてよいもんあれも國讓今十八ノ十二うつくみおもさふ。とうもとの変格化活のおなれをのへる也。さるう／＼妙おもさふも截断にろだうの同事あれとあち／＼まきうのさふもさきう言と連体言とをうねるかうこれも尊えおくへき事なるをそれにつきて又こうろえれくへきえうれ大鏡序今十九ノ二人／＼とある其う／＼ふの轉りとせゆるよこき人／＼とつけれどおもさふもあは連く言をうひたるといひそのをあち／＼と四段の活く言とこゝでまきう／＼ふへきよ似されと大鏡序とそのうみく妙詞のつうひ又弘仁式陰陽式大きみ乃紛ひたる然らば今本の字誤のあち／＼こそ。又弘仁式陰陽式大宮内尔云天地能諸神等波平久於太比尔伊麻佐布倍志止申とあらとうれと二方の活く語のいきをのへる也抑いきをのへるもあしま

に おもひ おもひうじのあくひもとろもつひ取も大きあひ
似ころ城りく延へも約めもいろさみゆへ大凡は同し然る活ちきは
皆別也 いまいも四段と下二段と二きよ活きもくまんと四段と限り
かまくらを変格一種別の活き おもひうじと下二段と限るあり たち入り
て いふ おもひうじもれをしまひ也ともやくの人れ註せるは妙
詞のあほとそれどろもへをいふとはそれ必しもむうこととはあら
詠と詞の活きを精く論めて いふときと上のとくと辨ふる
如くなれもむりしよりれときりぬとてあほあほあほ
しまひれ也と註してよき處とおもせざれ也と註してよき處
とあるをよく辨ふへし さて又いそんするきんするあくよがる
も友くみオ四十九段なるすあり此おもひうじ
のほきとオ二十段の也おもひといふ詞をうけしおんす見んす
て友くみ四十九段の活きいさんをうたおもせんするれをせうするとそりふ

へくり生るあうりふへきとアロコテおもひうじと今の人 源氏弔木 湖ニ
十五い のつくれるもみかむりし正き例 はなこくへるそく 源氏弔木 湖ニ
十五い つくれるも人どくもくとあくりる御物語哉とてうら笑
ひおもさうは末摘花むすび 公達集りて云 云物のねとも常トスリヒ耳
うしかみ一くて云 云太鼓をさへ高欄のやまとまうもとせ手
つくり打あひし遊びおもひうじ御いとみあきやうとて云 橋姫巻
心もまとひて耻はず おもひうじと見えしもとと辨考へて知ふへ
しもほことよきかる又外の書とももういつれも理本をいふ詞とてこそあ
しきあれもくられうれ後のあとをいさとていへるなどいふあくよ
同じく次友鏡第四十九段に入へきすあくよろことを知るへし

5年11月

日	月	年
1	11	5
2	12	6
3	13	7
4	14	8
5	15	9
6	16	10
7	17	11
8	18	12
9	19	13
10	20	14
11	21	15
12	22	16
13	23	17
14	24	18
15	25	19
16	26	20
17	27	21
18	28	22
19	29	23
20	30	24
21	31	25

○山口葉上

○五十七終

